

La France) (フランスの人口) の或る箇所において、かう言つてゐる。「農村を棄てる際に、労働者は遠方に見える高い賃銀に誘惑される、彼等は餘儀ない缺勤、住宅および生活資料の騰貴、及びその他の失費を餘儀なくさせるところの全べてのものを計算に入れてゐないのである。彼等の多數は自己の運命を改善せずして自己の境遇を變じただけである。」¹⁾が同じ著述の他の箇所においてその同じ尊敬すべき學者が、尤も彼自身「社會的調和に關するバスターアの哲學的見解」に對する自己の理解の薄弱を承認してはゐるが、これらの條理ある考察を忘れ去つて、勞賃の水準の上昂に基づいて、労働者の生活の全般的改善を説いてゐるのである。²⁾

註1 《La population Française》, t. II, p. 413. 同様ニ H. Joly —《La France Criminelle》, Paris 1839, p. 330 を参照せよ。

註2 《L'ouvrier américain》, t. I, p. 503.

註3 《La population Française》, t. III, p. 86 et suiv. 同様ニ 《L'ouvrier américain》, t. II, p. 215 et suiv. を参照せよ。

若しも讀者がかゝる「客觀的なる」學者の例に従ふことを欲しないで常に労働者の生活の全べての方面を考慮に入れるであらうならば、彼は、大ブリテンにおいてさへもプロレタリアートの物質的状

態の改善は非常に取るに足らぬものであつたと言ふ我々の言葉に同意しなければならぬであらう。普通に「労働者階級の進歩」の明かなる證據として、この國における被救恤窮民の減少が指摘される。しかし既にマルクスは言つた、「政府の被救恤窮民統計は富の蓄積と共に、階級闘争、従つて、労働者の自覺の發達につれて被救恤窮乏の現實的範圍に關し、益々欺瞞的となりつゝある。」これに尙ほ窮民の數の減少が同様にまた、全ての概して貧困なる者、特に多少でも收入ある成年労働者に自宅において補助することを益々困難にした所の多くの法令によつて條件づけられたことを附加へることが必要である。非常に残酷であつたこれらの規定のお蔭で、この種の助力を受けてゐた貧困者の數は、イギリスにおいて亦ウエールズにおいて一八四九年における九五五、一四六(人口の五・五パーセント)から一八九七年における六〇〇、五〇五(人口の一・九五パーセント)に落ちた。しかしそれと同時に労働者の家に收容された貧困者の數は一三三、五二三から二一四、三八二に増大した。この種類の貧困者數の人口總數に對する百分比は、成程、第一の場合には〇・七七、第二の場合には〇・七〇であつて、殆ど變化なしに止まつた。²⁾しかし正にこの、労働會館において、救恤されつゝある窮民比率の不變化は、イギリスの被救恤窮乏の誇大視された減少が、欺かれることを欲し、見るために眼をつけてゐない人々のみを欺瞞することの出来る奸計であることを考へさせなければならぬ。エ・シムコックス夫人は正當にも、イギリスの赤貧統計は決してイギリスにおける貧困の眞實の尺度を提供するものではないと言つてゐる。「一年間に死亡する人間の一〇パーセント以上は、——と彼女は言つてゐる、——

「労働者會館および病院（慈善家の費用で維持されてゐる——ゲー・ペー）において死んでゐる。そしてこの死亡数は二百五十萬の人口に相當してゐる。かくて我國の住民の約三百五十萬は或は眞の赤貧の中に、或は病氣にさへかゝれば眞の赤貧者たるに充分であるやうな状態の中にある。」

註¹ 『資本論』第一卷、五六三—五六四頁。

註² P. F. Aschrott 《Das englische Armenwesen》, Leipzig 1886, S. 422. 尙ほ彼の《Die Entwicklung des Armenwesens in England seit dem Jahre 1885》, Leipzig 1886, S. 64 を参照せよ。

註³ Industrial Remuneration Conference Report, p. 89.

一一一

これは極めて暗憺たる光景である。しかしこの暗憺たる光景も現實の暗憺たる性質を完全には傳へぬのである。他の源泉から我々は、赤貧の中に死ぬ人々の數がエ・シムコックス夫人が考へたよりも遙かに多いのを知つてゐる。労働者の家およびそれに附屬の病院において世界において最も富裕なる都市、ロンドンの六分の一が死んでゐるのである。しかしこれで全部であるのではない。イギリスの人口の二〇パーセントから二五パーセントまでが、教區が自己の費用においてその葬式を引受けなけ

ればならないほどの赤貧に近い状態において死んでゐると考へるべき根據がある¹⁾。有名な研究家チャールズ・ブリスは、イギリス及びウェールズにおいて五十六歳に達したすべての人々の約二〇パーセントが慈善事業に援助を請はねばならない状態にあることを指示した²⁾。イギリスの住民の中には云ふまでもなく、唯だ少數の老人が貧困に陥ることが、——若しあるとすれば、——ありうる階級がある故に、労働階級は、相對的に貧困老人のより大なる數を與へることになる。ロンドン及び中央諸州においては全プロレタリアの四〇乃至四五パーセントは老年において赤貧に陥つてゐる³⁾。

註¹ 《Fifth and Final Report of the R. Commission of Labour》, part I, London 1894, Report by W. Abraham, M. Anstin, I. Mawdsley and T. Mann, p. 128.

註² 《Pauperism》, 1892 p. 54. 《The aged Poor in England and Wales》, London 1894, p. 38.

註³ 《Charles Booth》, p. 39. しかしこれもまだ終りではない。或る農村的行政區においては各老年労働者が赤貧の中に死んでゐる《Fifth and Final Report of the Com. of Labour》, p. 125, 128, 151 を見よ。

これは言葉の文字通りの意味において怖ろしいことである！そしてこの恐怖の爲めにこそブルジョアジの代辯者たちは、富の分散について、社會的矛盾の鈍ぶり、等々について講釋をするのである。まことに、彼等の厚顔無恥はこの場合壯觀にまで達してゐる！しかもマルクス主義の『批判者』

諸君がかかる破廉耻に批判的に對することが出來ず、益々代辯の影響の下に落込みつゝあるには驚かざるを得ない！

イギリスの労働者階級の状態に通ずる者は、自殺の率が特にイギリスに於て五十五歳以上の老人間に高いことを聞いても驚かないであらう。¹⁾ アングロサクソンの労働者のみがよく爲しうるやうな緊張を以て一生を働き通した後に、プロレタリアの老人達は自由意志をもつて地上の樂園を棄て、天上の樂園に移り行きつゝある。そしてイギリス労働者が發達すればするほど、彼は益々屢々自殺に、赤貧を免れる最も確實なる方法として、依據するに至る。人口の二七パーセント以上が自己の姓名をも書きえないやうな地方においては、自殺数は住民百萬に對して五七・五に及んでゐる、名前を書くことの出來ない者が住民の總數の七乃至二五パーセントに過ぎない地方においては、自殺者の數は百萬人に對して六九・二人にまで上つてゐる。最後に、署名しえない人々の數が一七パーセントを越えないところでは、我々は住民百萬人に對して八〇・三人といふ自殺者の最大數を見出すのである。²⁾ それは當然のことである。人間が發達すればするほど、彼にとつては貧困および一般に生活不如意に結付いた卑屈を忍びえない。或は、それとも、この場合他の説明の方がより肯綮に中つてゐるかも知れない。或は、自己の姓名を書きえない人々の數は、——我々がロシアにおいて見るやうに、——産業の發展につれて減少しつゝあるといふこと、及び自殺者數の増加は、かくて、『社會的』富の増加の恩惠的な結果であると假定しなければならぬかも知れない。その何れの場合においても我々は資本主義社會にとつ

てもまた種々様々な調子をもつて社會的矛盾の鈍ぶりについての子守歌を唄つてゐる諸君にとつても全く好ましからぬ結論に到達するのである。

註1 Ogle—《On suicides in England and Wales》, Journal of the R. S. Society, March 1886.

註2 Ogle, op. cit., p. 112.

イギリスのブルジョアジーが自己の『慈善』を實施しつゝある假借なき兇暴さにかゝはらず、富裕なるロンドンにおける被救恤窮民の數はその人口の總數よりもより急速に増大しつゝある。¹⁾ 如何にしてこのことの後に、『共産黨宣言』においてつぎの如く言つてゐるマルクスおよびエンゲルスの誇張を責めることが出来るか、『労働者は赤貧となる、そして赤貧は人口及び富よりも一層急速に増大する。』

註1 ホブソン、前掲書、二二頁。

若しも世界市場に對する持続的な支配のお蔭で、少しでも自己のプロレタリアートの或る層の状態を改善することの出來た大ブリテンの状態にしてさうであるとしたら、産業的獨占の優越を持たない

他の諸國においてはそれは如何なるものでなければならぬか？ これについては既に我々によつて上に引用された、ベルギー労働者が自己の力をその價值以下に賣ることを餘儀なくされてゐるその事實が一種の概念を與へることが出来る。こゝにはフランスのプロレタリアの状態を特徴づける二三の事實を掲げよう。

一八三三—一八四三年の期間に白パンの價はフランスにおいて一キログラム三四センチム二分の一であつた。一八九四年には一キログラムのパンはパリにおいて三七センチム二分の一以上四〇センチム以下を値した。¹⁾ 一八三一—一八四〇年において牛肉は一キログラム(卸値段で)一フラン五センチム、豚肉は一キログラム七八センチムであつた。一八九四年には牛肉は既に一キログラム一フラン六四センチムとなり、豚肉は一フラン五四センチムとなつた。²⁾ 一八五四年に鶏卵一〇〇個五ニフランを値した、が今日は八ニフランである。³⁾ 一八四九年には一ヘクトリツトルの馬鈴薯(下等品)三フラン二分の一乃至四フラン二分の一を値した、今やそれは七乃至一二フラン二分の一を値してゐる。バターキログラムが一八四九年には一フラン二八センチムから一フラン九〇センチムであつた、今やそれは二フラン五センチムから四フラン二六センチムである。最後に、大豆は一八四九年から一八九二年の間にその價格が二倍に騰貴した。⁴⁾

註1 M. Pelloutier—《La vie ouvrière en France》, Paris 1900, p. 183.

註2 Ibid., p. 186.

註3 Ibid., p. 189.

註4 Ibid., p. 191.

ペルーチエの計算によれば、食料品の價格はフランスにおいては最近三十年間に二二—二三パーセント騰貴した。しかるに勞賃の水準は平均において一七パーセント以下の増大であつた。若しも諸君がこれに大都市における家賃の大騰貴を加へるならば、諸君は不可避免的に、フランスのプロレタリアの物質的狀態は三十年間に相對的のみならず、絶對的にも悪化したといふ結論に到達するのであらう。そしてこの結論はまつたく統計によつて確證されてゐる。それはフランスの労働者が今や半世紀以前よりもより悪しき營養を攝らされてゐることを示してゐる。²⁾

註1 上掲書、一九四頁。

註2 ペルーチエ、前掲書、一八七、一九〇、一九四頁を参照せよ。

フランスのプロレタリアートの經濟狀態の絶對的悪化は自然的に被救、窮乏の増大を結果する。労働者は赤貧となる、そして赤貧は人口および富よりも一層急速に發達する。一八八六—一八九一年の

五年間にフランスの首都の人口は四・〇一パーセントだけ増加した。がこの ville lumière (光明の都)における窮民の数はその期間に二三・一パーセントを増加した。次の表は被救恤窮乏の増大が既に長らくパリにおいて眞に怖るべき程度に達してゐることを示してゐる。

年 代	パリによつて貧民の爲めに支出される額	人 口
一八五〇	五,〇〇〇,〇〇〇	一,五三二,六二二
一八七〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇	
一八九二	一八,〇〇〇,〇〇〇	
一八九五	二〇,〇〇〇,〇〇〇	二,三八六,二三二 ¹⁾

註1 Pellouier, op. cit., p. 289.

そしてかくの如きは單にパリにのみ限ると考へてはならない。それはフランス全國に亘つて殆どさうなのである。一八七三年にフランスには八〇六,〇〇〇人の窮民を救恤しつゝある六,七一五の『慈善團體』があつた、一八六〇年には一一,三五一の慈善團體が一,一一五,九〇〇人を救恤した。一八八〇年には慈善團體の数はすでに一五,一三八に達し、その救恤を受けてゐる窮民の数は一,六四七,〇〇〇人に達した。二十八年間(一八六〇—一八八八年)に窮民の数は四二パーセントを増加

し、それに對して人口は僅かに五・四パーセントを増加したに過ぎなかつた。『労働者は赤貧となる、そして赤貧は人口および富よりも一層急速に發達する……』

註1 Leroy-Beaulieu—《Traité théorique et pratique d'Economie politique》, Paris 1896, t. IV, p. 468.

一三

イギリスにおける被救恤窮民の公の数の減少を見て傲慢に頭を擡げつゝあるブルジョア經濟學者たちは、フランスの窮乏統計の前に謙遜に眼を伏せてゐる、その際非常に好都合にも、公式に認められた被救恤窮乏の數字はそれだけではまだ何物をも證明しないことを思ひ出しながら。我々もまた、個別的に取られたこれらの數字がプロレタリアートの經濟的地位の誤りなき表示者として役立つことが出來ないの思ふものである。それゆゑ我々はこれらの數字の提供する證據を他の種類の統計的材料の助をかりて吟味することが必要であると考へる。

一八三八—一八八八年の五十年間に犯罪は、フランスにおいて次のやうに増進した、	
五〇年間における處罰者數の増加率	五一パーセント
暴行	六九
所有權侵害の犯罪	
反スツルーウエ論	三九九

道徳的犯罪.....二四〇
 浮浪および乞食.....四三〇¹⁾

註1 Leroy-Beaulieu—《Traité theorique et pratique d'Economie politique》. Paris 1896, t. IV, p. 468.

乞食および浮浪の故に處罰された人々の數の驚くべき増大は、最も決定的に我々の爲めに疑いも
 のとして残つたフランスにおける被救恤窮乏の官許的統計の證據を確證する。我々は、従つてこの統
 計が眞實を語つてゐるものと認めなければならぬ。

しかも我々に向つて、フランスは——没落に傾きつゝある國であると言はしめよ、この「没落に傾
 きつゝある」國が今日ヨーロッパにおける最も富裕なる國の一つであるのだ。その上、被救恤窮乏の
 急速な増進は常にフランスに於て觀察されるばかりではない。次はブラッセル及びその近くの大都市
 の團體における一八七五—一八九五年の期間の被救恤貧困者數の増加を示す表である。

註1 《L'organisation de la Bienfaisance publique》, par L. Bertrand, Bruxelles 1900, p. 16.

被救恤者一人に對する割合

國體	一八七五年	一八九四年
ブラッセル.....九	九	四
シャルベーク.....一六	一六	一一
モレンベク.....一一	一一	一〇
ラーケン.....一六	一六	二五
アンデルレヒト.....三五	三五	八
サン・ジョッス.....二四	二四	一五
サン・ジール.....二五	二五	二〇
イクセル.....二〇	二〇	一七

ラーケンを除いて、我々はすべての團體において被救恤窮乏の異常に急速なる増進を見る。アンデ
 ルレヒトにおいては一八七五年に被救恤者一人が三五人に當つてゐた、しかるに今や一人の被救恤者
 がすでに八人に當つてゐる。ブラッセルは尙ほ先へ進んだ、ここでは人口の四分の一が恩恵に對して
 手を差延べてゐるのである。地方においては、譬へば、ブリュッグ、イーブル、エンギエン、ニール、
 ツルノーにおいても事態はよりよくなつてゐない、が所々では尙ほより悪くもなつてゐる、これらの
 都市の或るものにおいては一人の被救恤的貧困者が住民の二三人に當つてゐるのである。結果は、ベ
 ルギーにおいても『労働者は赤貧となる、そして赤貧は人口および富よりも一層急速に發達しつゝあ
 る』こととなる。

註1 Ibid, p. 17.

これらの材料を我々が借用したところの著者は、一度ならずこの論文において我々によつてなされたところの但し書をなすべく急いでゐる、被救恤的貧困者の数はいまだ以て貧困の眞實の程度を示すものではない¹⁾。そしてこのことは、云ふまでもなく、何人も否定しないであらう。しかし、この數の異常に急速なる増大が同様にまた労働者階級の幸福の増進を示すものでないことは疑ひない、どんな労働者が、若しも貧困が彼の中に人間的資格と階級的誇りの感情を征服しない限り、慈善院を訪れるであらうか？

註1 Ibid, p. 16.

公式的な赤貧の程度がベルギーよりも遙かに低いドイツにおいては、我々は次のやうな興味ある現象に出遭ふ。二〇、〇〇〇以下の住民を有する都市においては、被救恤的貧困者の比率は四・七五に達してゐる、五〇、〇〇〇—一〇〇、〇〇〇の住民を有する都市においてはそれは六・三九に増昂してゐる、そして最後に、一〇〇、〇〇〇以上の住民の人口を有する都市においてはそれは既に人口總

數の六・五一となつてゐる¹⁾。

註1 Leroy-Berulieu, op. cit., t. IV, p. 471.

こゝでもまた、従つて、貧困は富よりも急速にはないとしても、人口よりもより急速に發達することが明かである。何をこれについて、P. スツルルーエ氏は言ふであらうか？

彼は、多分、最近ドイツにおいては被救恤的貧困者の數が著しく減少したと言ふであらう。これは眞實であらう。しかし何故に減少したか？ 單に救恤制度が變化したからである。かゝる變化から労働者の生活の改善までにはまだ遠い。

同様にわが「批判者」は、犯罪は常にフランスにおいてのみならず、この點に關して研究されたすべての資本主義國においても増加しつゝあるのを認められんことを希望する¹⁾。ドイツにおいては一八八二年に十二歳以上にして軍職に勤務してゐない者の一〇〇、〇〇〇人に對して一、〇四三の處罰者があつた、しかるに一八九五年には既に一、二五一一人になつてゐる²⁾。犯罪のこの増加は何によつて條件づけられるか？ フランスの社會學者たち(譬へば、ルイ・ブランは自己の「Organisation du travail」において)は既に久しくそれを、生存に對する鬭争の増大しつゝある困難の、そして、部分的には、労働者階級の貧化の結果として指摘した。經驗はまつたくこの指摘を確證した。我々によつて引用さ

れたばかりの教授リストは、犯罪の經濟状態への依存關係はすべての者に知られてをりまた何人によつても最早否定されないと云つてゐる。³⁾そしてその彼が、經濟状態の下には何よりも先づ勞働階級の一般的状态 (die Gesamtlage der arbeitenden Klassen) 即ち當に『財政的』意味においてのみならず、他のすべての意味においての彼の状態を理解しなければならぬと言つてゐる。我々は既に、勞賃の水準の上進、——それをブルジョア經濟學者たちは我々の耳に我鳴り立てたのであるが、——はまだプロレタリアの境遇の一般的改善をもたらさないことを知つてゐる。人口よりも遙かに急速に増進する犯罪は、更にまた我々にこの争ふべからざる眞理を思ひ出させる。事實において、未成年者の犯罪が成年者の犯罪よりも遙かに急速に増加しつゝあることを注意せよ。一八二六年から一八八〇年へかけてフランスにおいて行はれた成年者の犯罪總數は、三倍になつた、が未成年者によつて行はれた犯罪數は、四倍になつた。⁴⁾一八八〇年後には少年の犯罪數は尙ほ一層急速に増加した、現在においては、フリーエの言葉に従へば、各種の起訴によつてパリで捕縛されたすべての人々の半數以上が、未成年者の數に屬してゐる。

註¹ H. Ferri—《La sociologie criminelle》. Paris 1883, p. 163 及び以下を見よ。

註² Dr. Franz von List—《Das Verbrechen als Sozial-pathologische Erscheinung》, Dresden 1899, S. 12-14.

註³ Ibid., S. 19.

註⁴ A. Fouillé—《Les jeunes criminels》, 《Revue des deux Mondes》, 1897, Janvier, p. 418

が未成年者の犯罪と並行して以前には全く稀な現象であつたところの少女の賣淫および少年の自殺が激増してゐる。そしてそれは當に、——

パリにおいて、そこでは喧騒の間に
遊蕩と悪業とが熱沸してゐる。——

行はれてゐるばかりでなく、それは全フランスにおいて行はれてゐるのであり、それはまたフランスの外においても行はれてゐるのである。純潔なドイツにおいては、一八八二—一八九五年の期間に若い犯罪者の數が殆ど五〇パーセント増加した。¹⁾この純潔な國は賣淫の方面においても一つ所に止まつてはゐなかつた、一八七五—一八九〇年間にベルリンの人口は毎年三—四パーセントだけ増殖した、が淫賣婦の數は八—七パーセントを増加した。²⁾

註¹ Von List, op. cit., S. 17.

註² Paul Hirsch—《Verbrechen und Prostitution》. Berlin 1897, S. 7. マンニールの興味ある著書、——《Salaires et misères des femmes》. Paris 1900 を参照せよ。この書物は賣淫と貧困とが如何に密接なる關

少年の間における犯罪と墮落の増加を惹き起す原因にまで言及する必要があるであらうか？ これらの原因の説明としては、譬へば、フランスにおいて『犯罪』兒童の六〇パーセントが乞食および浮浪兒から成つてをり、二五パーセントは窃盜のためにブルジョア裁判所の厄介になつてゐる。婦人賃労働の發達によつてそれ自身條件づけられるところの劣悪な保護の結果として、幼兒は浮浪の習慣に染み、次いで飢ゑて死なう爲めに、乞食となりまた盜むことを餘儀なくされるのである。犯罪一般特に少年犯罪の増加は、明かにプロレタリアの社會的地位の惡化を立證するものである。

註1 Ferdinand Dreyfus 《Misères sociales》, Paris 1901, p. 8.

序でながら、この争ふべからざる事實の承認は未だカウツキイをして工場における婦人の労働禁止に關するキリスト教社會主義者たちの要求を支持することを餘儀なくするものでないことを注意して置かう。カウツキイは、かゝる禁止は労働者の社會的地位を改善しえないばかりでなく、最も暴虐なそして残酷な資本による婦人の搾取形態の發生と鞏固化とに新しい、非常に強い刺戟を與へることによつて、一層それを惡化するであらうことを確信してゐる。かゝる搾取形態の發生と鞏固化とは決し

て勤勞大衆の地位を改善するものではないであらう。それ故にこそカウツキイ及び彼の同意見者たちは斷然キリスト教社會主義者たちの反動的な提案に反對するのである。これは全く以て論理的である、だから若しもこゝに嘲笑のための場所があるとしたら、それは唯だ、婦人労働の發達の中に労働者階級の貧困化の證據を見出してはゐるが、しかしそれと共に或るどんなかのデクルチンスの實際的な提案を採用しないカウツキイを、疑はしき不徹底の故に無視しようと思ひ立つたベ・スツルーエ氏に對する嘲笑のための場所のみである。

一四

犯罪について言ふ場合、その急速なる増加に際しては特に急速に累犯者の數が増加することを忘れてはならない。¹⁾『我々の處罰は、——とこれに關してエフ・リストは言つてゐる、——改化的若しくは威嚇的影響を與へない、それは一般に犯罪を未然に防ぐことをしないで、寧ろその傾向を強めるのである。²⁾

註1 一般的な規則からの例外をなすものはスキスの二三の州に過ぎない、そこでは累犯者の總數も比率も減じてゐる。しかしこれらの諸州は彼等の特殊な状態の故に計算に入らぬのである、これについては、譬へば John Quénot—《La criminalité à Genève au XIX siècle》, Genève 1891, p. 116-117 を見よ。

また Zuercher—《Die Selbstmorde im Kanton Zürich in Vergleichung mit der Zahl der Verbrechen》を参照せよ。(Zeitschrift für schweizerische Statistik, 1898, Lieferung, VI.) シェンヘルは、彼等の犯罪数の減少は、自殺者数の増加によつて伴はれたと言つてゐる。

註² Op. cit, S. 16.

これは確かにさうである、しかし、累犯者たちは道徳的に謂ゆる偶然的犯罪者とは全く異なる集團を形成してゐるものであることもまたそれに劣らず確かなことである。これは正に、残念なことには殆ど絶對的に、無智でないとすれば、道徳的頹廢と凶暴が君臨してゐるところの集團である。そして常に道徳的頹廢と凶暴のみではない。累犯者の間には退化の疑ふべからざる徴候を見せてゐる人々が少くない。彼等には特にマウドスリーの次の言葉が當嵌まる、「犯罪者の間には肉體および精神組織の不完全によつて見分けられる一種類がある……著しい割合の低能者若しくは精神錯亂に悩んでゐるまたは狂人を出してゐる家族に屬してゐる精神病者である。」これらの言葉の正當性を確かめたいと欲する者には、我々は去年パリにおいて出版されたエ・ローラン博士の非常に興味ある著書、《Les habitudes des prisons de Paris》(パリの囚人の習慣)を勧めるであらう、それにはラカッサ、ニユの同様に興味ある序文がついてゐる。ローランはラカッサ、ニユと同様に、ロンプロゾ、一派の滑稽な誇張からは遠い。しかし彼の書物を注意して讀む者は、その中から、累犯者として社會が非常に屢々、社會的・歴

史的過程の被動的な、病的な産物を罰してゐるといふ搖ぎない確信を汲み取ることが出来るであらう。が若しもかゝる人々の數が乞食、浮浪人、淫賣婦、及びその他のルンペン・プロレタリアートの代表者たちの數の増大と共に増加するとしたら、我々が今日に至るまでマルクスと共に次の如く言ふ權利を有してゐる事は明かではないか、「一方の極における富の蓄積は同時にその對極において貧困、勞働苦、隸徒、無智、凶暴、及び道徳的頹廢の蓄積を作出する。」これは曾てバスターア及び彼の最も近い追隨者たちが誤魔化し切ることが出来なかつたと同様に、現在のブレンタノ派およびマルクスの『批判者』たちが言ひのがれをする。(wegschwätzen)ことの出来ない事實である。そしてこの争ふべからざる事實の故に、中世紀においては勞働者の社會的地位は資本主義社會におけるよりも良好であつたといふマルクス及びエンゲルスの思想を極端なる誇張であると考へてゐる人々は非常に我々を驚かすのである。この思想は、或は、現代社會に固有なる矛盾を鈍ぶらさうと考へてゐる人々にとつては都合が悪いかも知れない。しかしそれが正しいといふことも、それはひとりマルクスの『末流』のみが認めてゐることではな³。

註¹ 《Le crime et la Folie》, Paris 1880, p. 30.

註² 一九〇年に書かれたる。

註³ 『勞働者の條件はそれ故に當時にあつては甚だ堪へらるべきものであつた、そして私は近代批評家我々に提供

するところの教によつて、附加へて言はう、労働者の條件は今日の労働者のそれよりも優れてゐたに相違ない。この農奴は今日の労働者たちが甚だ羨望すべきものとして懇望するところの地位を有つてゐたのである。』
P. Hubert-Valleux — 『同業組合制度を公平無私な態度で深く究めて闡明したところの眞理は、十三世紀および十四世紀における労働者の條件が現在の條件に優つたといふことである』(XIX)

こゝでベ・スツルーウエ氏は我々をおしとどめて、彼が反駁しえざるものと考へてゐる自己の議論を思ひ出させてゐる。若しも一方の極における富の蓄積がその對極における貧困、肉體的退化と精神的退化の蓄積を伴ふならば、如何にして社會の根本的な改造を起すことが出来るか？ 果して退化した労働者階級は歴史の知れるすべての變革の中の最大なるものを成就しうるであらうか？¹⁾

註1 この論證は、すべての残りの大部分と同様に、わが『批判者』によつてマルクスのブルジョア反對者達から借用されたものである。譬へば、ケルコフの『History of Socialism』, p. 160を見よ。(我々は第二版から引用する、しかし我々によつて示された論證は第一版にも含まれてゐるのである。)

これに對して我々は、マルクス及びエンゲルスは決してプロレタリアートの退化せる諸要素を、革命的勢力とは考へてゐなかつたと答へるであらう。このことについては『共產黨宣言』の中にも、同

様にまたエンゲルスの著書『Der deutsche Bauernkrieg』(ドイツ農民戦争)の中にも決定的に語られてゐる¹⁾。しかし資本主義の發展はプロレタリアートの地位の相對的(所々においてはまた絶對的)悪化のみをもたらすばかりでなく、また更に『社會的解體の被動的產物』のみを創造するばかりではない。それは、その上に尙ほ、これらの被動的な產物の部類に落ち込んでゐないプロレタリアの思想を覺醒し、そして彼等から常に増大して止まざる社會革命の軍隊を組織するのである。貧困、等々の増進を指摘しつゝ、マルクスは同様にまた、『不斷に成長しかつ不斷に、資本主義的生産過程の機構そのものによつて教育され、結合され、組織されつゝある労働者階級の憤激』(我等の傍點)を指摘した。フランス若しくはドイツを見よ。犯罪、賣淫、及びその他の勤勞大衆の或種の要素の精神的頹廢の徴候の急速なる増大に拘らず、全體としての労働階級は益々意識的となり、益々社會主義的精神をもつて滲透されてゐる。プロレタリアートの社會的境遇の悪化は決して彼の階級意識を困難ならしめる條件の創造と同じではない。勿論、バクーニン流の無政府主義者だけが、貧困はそれだけで既にすべての可能なる煽動家の中の最良なるものであると考へることが出来た。しかし富裕もそれだけでは必ずしも常に革命的精神の『示唆者』ではないではないか。すべては時と場所の事情に係はる。

註1 バクーニンがマルクス及びエンゲルスを、彼等がすこしの希望をも『極貧プロレタリアート』に懸けることを欲しなかつたといふ、正にその理由で批難したことは興味あることである。『國家と無政府』八頁を見よ。

労働階級の社會的境遇の悪化を階級意識の發達と非共存的なものと考へてゐる「批判者たち」は、唯だもう歴史の唯物的説明を理解してゐないのである、それを、しかし、引證することが彼等は好きなのであるが。そしてこの彼等の無理解は同様にまた、ブルジョアジーに對するプロレタリアートの政治的勝利のために缺くべからざる經濟的諸條件についての議論の中にも現はれてゐる。凡ゆる所與の階級の政治的勢力は、とこれらの諸君は言ふ、その經濟的および社會的勢力によつて決定される、と。それゆゑプロレタリアートの政治的勢力の伸長は必然的に彼の經濟的力の成長を前提する、そしてその反對に、この最後のものゝ弱まりは必然的にプロレタリアートの政治的意義の弱まりを結果する。かくドイツにおいてはダウイツド、ウオリトマン、テイ・カムフマイヤー及びその他多くの「新しい方法」の代表者達が見てゐる¹⁾。ペ・スツルルーウエ氏は恐らく、バクーニン主義の保守的な變形の一種であるこの見解を悉く分け持つてゐるのではあるまい²⁾。しかし彼は、ベルンシュタインに對する自己の回答において彼の理論的無力を指摘したカウツキイにも同意してゐない。ペ・スツルルーウエ氏の意見に従へば、プロレタリアートの勝利の爲めには、唯だ徐々に經濟組織および經濟機關の地盤において獲得されるところの「組織化された力」が必要である³⁾。この意見の中では眞理が迷妄と似たく緋ひ交ぜられてゐる。組織化された力がプロレタリアートに必要なことは、それが新しい生産關係を目差して突進した凡ゆる他の社會階級に必要であつたと同様であつて、それは争ふべからざることであつて、そのことは嘗て「正統」マルクス主義者たちの誰もが否認しなかつたところである。しか

し何故にペ・スツルルーウエ氏は、この力が唯だ「經濟組織」の地盤においてのみ、即ち——若しも我が正當に彼を理解したとしたら、——協同組合またはそれ類似の「經濟機關」の地盤においてのみ獲得されうると考へるのであるか？ 若しもプロレタリアートの組織化された力が彼の「經濟機關」の發展に従つてのみ發展することが出来るのだつたら、それは決して新しい生産關係の創造のために缺くべからざるまた充分なる程度にまで發展することはないであらう、何となれば資本主義社會においては労働者たちの上述の如き機關はブルジョアジーの手にある「機關」に比して常に完全に取るに足らざるものであらうからである。

註1 カムフマイヤー——『Wohin steuert der Ökonomische und staatliche Entwicklung?』Berlin 1901 S. 32, 33, 35 及び以下。

註2 政治と經濟との關係に對するバクーニンの見解の特徴づけは小冊子『Anarchismus und Socialismus』において見よ。

Revo Archiv, I, 735.

次に、わが「批判者」の言葉の中で、プロレタリアートの組織化された力は、一切の他の力もさうであるやうに、——唯だ徐々に獲得されることが出来るといふことは正當である。しかし何故にこの

正當な思想は社會革命の概念を排除しなければならないか？ フランスのブルジョアジーもまた徐々に自己の組織化されたる力を獲得したのではないか、しかも彼等は自己の社會革命を遂行したのである。

尤も組織化されたる力の漸次的な獲得の不可避性に關する考察は、ベ・スツルウエ氏によつて彼の論文において憎むべき社會革命の概念を砲撃しつゝある理論的砲車隊の、多數の巨大なる攻城砲に並べて置かれたあまり大きくない太砲の一つに過ぎない。我々の最初の計畫に従へば、我々は讀者の前にある論文においてこの砲車隊を攻撃すべき筈であつたのである。しかしその後我々は詳細に社會的矛盾の純ぶりの理論を経済的地盤の上において究明することの必要を確信した。それゆゑ社會革命の概念に對して布かれた砲車隊の攻撃をば、我々は次の論文まで延ばさねばならなかつたのである。ここでは我々はわが『批判者』との最後の總勘定をなすであらう。ここでは我々は尙ほ一層明瞭に、如何なる種類の『マルクス主義』を現在彼が宣傳しつゝあるかを見るであらう。

第三論 文

ベ・スツルウエ氏は、周知のごとく、『認識論』について話すことが非常に好きである。成程、今

日まで彼は多少とも整然とそして徹底的に自己の『認識論的』見解を叙述することの必要（若しくは可能）を發見しなかつた。かゝる種類の整然たる見解を彼が持つてゐるかどうか疑はしくさへもある。しかしそんなことは凡ゆる都合のいゝ場合に、そしてつと悪いことには、凡ゆる都合の悪い場合に『認識論』を擔ぎ出すことを妨げぬのである。それゆゑ『認識論的』考察が彼の『社會革命に對する』闘争において主要の武器となつてゐることに驚いてはならない。

この『理論的偽概念』がどれほど無力であるかを我々に示すために、わが『批判者』は、認識論に對して過誤を犯さないことを欲する者は誰でも、如何に『進化論』を理解しなければならないかを説明する。次は我々が彼からこの點に關して知りえたところである。

進化の原則は、何故に變化が行はれるかについては何事も語ることなくして、極めて決定的に我々に、しかしながら、如何に彼等が行はれるかを示すのである。それは我々に彼等の形態を知らしめる。ところで彼等の形態は一言でもつて規定される、すなはち連続性（die Steigkeir）である。我々には連続的な變化だけが理解されうる。それゆゑ古い命題、*natura non facit saltus*（自然は飛躍をしない）は更に他の命題、*intellectus non patitur saltus*（知力は飛躍を許容しない）によつて補はれない。ヘーゲルは、量的變化が、或る一定の限界を越えようと、質的變化に轉化すると言つてゐる。そしてこの定式を正教的マルクス主義者たちは引證することを好み、無邪氣にもそれが社會革命の進展に現實的な説明を與へるものでもあるやうに思つてゐる。事實においてはそれは諸現象

を説明しないで、單に彼等を論理的範疇の助をかりて叙述するに過ぎない。しかもその際それは正に變化の連続的性質を示す。それ故にこそそれを引證することはまったく非確證的なのである。我々は不可避免的に、概念——社會革命は批判に堪へないといふこと、及びそれを意志の自由（無原因的活動の意味における）、精神の實體性、等々の概念と並べて置かねばならないといふ結論に到達する、カント以來我々は、これらの概念が實際的な意味においては甚だ重要なものではあるが、しかし理論上では全く無力であることを知つてゐる。

註1 Archiv für Soziale Gesetzgebung und Statistik. Bd. XIV, Heft 5/6, S. 679.

さうべ・スツルーヴェ氏は、努力して自己の議論をシュツペ、カント、ジグワルト、チーゲン、及び……エフ・キスチャコフスキイすらの著述からの引用をもつて固めながら、論じてゐる。しかしハイネが正當にも、引用は非常に著者を飾り立てるとは言つたが、我々は、「批判者」君の論證を跡づけた後、遺憾ながら益々、引用で自からを「飾り立てる」すべての著者が必ずしも思想の明白と徹底において卓れてゐるものでないことを確信するのである。

若しも社會革命なる概念が批判に堪へないものであるならば、借問するが、既に史上において行はれた所の社會革命は果してどうなるのであるか？ それは行はれなかつたものと考へるのであるか、

それとも、それは正教的マルクス主義者たちがこの言葉に附してゐるやうな意味における革命ではなかつたと認めるのであるか？ しかし我々が、フランス大革命は事實においては全く起らなかつたと、譬へば、言つたところで、恐らく誰もそれを信じないであらう。また若しも我々が、この大革命は正教的マルクス主義者たちが言つてゐるのとは似てもつかないものであると斷言しようとするならば、これらの強情な人々は、我々が事態を正しくなく描出してゐるのだと言つて、直ちに我々を遮るであらう。正教的マルクス主義者たちの意見によれば、フランス大革命はこの言葉の完全なる意味における社會革命であつた。成る程、それはブルジョア革命であつた、しかるに今や番に立つてゐるのは——正教的マルクス主義者たちが考へてゐるやうに——プロレタリアートの革命である。しかしこれは事態を變ずるものではない。若しも概念——社會革命が、自然は飛躍をなさず、知力がそれを許さない故に無力であるならば、明かに、これらの斷然たる論證は同じの程度においてブルジョア、ジ、の革命にも、プロレタリアートの革命にも關係しなくてはならない。が若しもブルジョア、ジの革命が、飛躍は「不可能的」であり、變化は「連續的」であるに拘らず、既に久しい以前において行はれたとしたら、我々は、自分の時においてプロレタリアートの革命もまた、云ふまでもなく、それが自己の道程においてべ・スツルーヴェ氏が自己の「認識論的」議論において我々に向つて指摘してゐる以上の重大なる障礙に出遭はない限り、行はれるであらうと考へる一切の根據を有する。

ヘーゲルの『定式』は諸現象を説明せず、唯だ彼等を叙述するのみである。これはその通りである。

しかし問題はまづたくそこにあるのではないか。問題は、「定式」によつて與へられてゐる叙述が正しいかそれとも誤つてゐるかにある。若しもそれが正しいならば、ヘーゲルが正しいことは明かである、が若しもヘーゲルの正しいことが明かであるならば、再び同様に、諸變化の連続的性質——ベ・スツルローウエ氏自身の承認するところによれば、それをもヘーゲルの「定式」は指摘してゐるのであるが、——は、自然がなさないやうに見え、知力が許さないやうに見ゆる「飛躍」そのもの、可能性を決して排除しないことは明かである。

二

一般に「飛躍」は、可成りに意地悪くわが『批判者』を、彼自身の議論の領域にまで抑止しがたく浸み透つてゆきながら、嘲笑してゐることを注意する必要がある。何よりもよくこのことは彼によつてジグワルトからなされた引用文によつて確證される。

ジグワルトは、若しも我々の眼の前で何等かの物が變化するならば、譬へば、若しも青い紙が赤色になり或は蠟の一片が、煖爐の中に置かれて、融けてゆくならば、我々に與へられた實體が他の何物かによつて變へられてゐると假定すべき如何なる動機をも與へないところの連続的過程に當面する。その反對に、與へられた場所において行はれてゐる諸變化の連続性は、我々をして、物はすべての直接的に我々によつて知覺される特性、すなはち温度、色、外形、等々が變化した場合にさへも

同じものであつたことを確信させるのである。

ジグワルトのこれらの考察はわが『批判者』によつて、概念——社會革命の無力を曝露する論證の一つとして引用されてゐる。しかし事實においては彼等はこの概念を破壊せずして、寧ろそれを鞏固にする。彼等は、——如何なる條件においてまた何故に與へられた對象が我々にとつて、彼等の蒙る變化にかゝはらず、同一の對象として止まることを続けるかの問題に對して——答へられるだけ——答へてゐる。しかし彼等の中には、我々を圍繞してゐる對象においては、我々が飛躍と呼ぶ權利をもちうるやうな急激な根本的な變革が不可能であるといふ思想の證明の影すらもない。丁度その反對に、ジグワルトによつて引かれてゐる例證の一つは極めて表現的に、かゝる變化がまづたく可能であり、全然自然であり、すこしも異常でないことを我々に思ひ出させるのである。煖爐の中に置かれた蠟が溶解する時、彼の形状の中には全革命が起る、彼は固體であつた、彼は液體になつた。そしてこの變化は、勿論、多かれ少かれ『連續的』な過程、多かれ少かれ『漸進的』な蠟の加熱を前提するとは言へ、變化そのものは『漸次的』ではなく、正に突然に、溶解に必要な温度に達するや否や行はれるのである。こゝに最も疑ひなき (salvus) (飛躍) が起る。しかるにベ・スツルローウエ氏は我々に向つて、自然は飛躍をなさない、そして知力はそれを許さないといふことを示し始めたのである。これはどうしたことであるか？ それとも、或は、彼は自分自身の知力だけを念頭に置いてゐるのかも知れない、それは確かに、彼が——よく言はれるやうに、——プロレタリアートの獨裁を「許す」こ

とが出来ないといふ單純な原因によつて飛躍を許さないところの知力である。

四二〇

註1 讀者は加熱の連続性が必須的でないことを理解してゐる。若しも私が、蠟の熱をa度まで高めた後に、それを加熱することを中止し、a/2まで冷却し、次に再び溶解するまで温め始めるならば、結果は連続的な加熱の場合と同様であらう、しかし唯だそれはより大なる時間とより大なる熱量とを要するであらう。

若しも我々が、ジグワルトの議論を正しく理解する骨折をなした後に、それを人間社會に當はめようと欲するならば、我々にはかう言はなければならぬであらう、十九世紀の初頭においてフランスは、十八世紀末において社會的轉換がそこで行はれたとは言へ、依然としてフランス（「同一の國」）であつたことを信じてゐる。そして我々がそれを信ずるのは、第一に、この國における、革命前後の變化が連続的に一定の領土において（「與へられた場所において」）行はれたからであり、第二に、この國の住民が多くの點において（譬へば、人種および言語の點で）十九世紀において革命以前にあつたと同様であつたからであり、第三に、何となれば……しかし我々はすべてこれらの「何となれば」を計へ上げる必要はない、我々にとつて必要なのは唯だ、何故にまた何時與へられた物（若しくは國）が我々にとつて「同一なるもの」として止まることを続けるかの問題は一事であり、人間社會の組織において（若しくは物の諸特性において）革命（若しくはそれに類似のもの）と叫ばれる急激なる根本

的變化が可能であるかまた考へられうるかどうかの問題はまた別の一事であることを示すことである。若しもベ・スツルーウエ氏によつて引用されてゐる著者達が、これらの問題の第一に對するまづたく汲盡的な回答をさへ提出したとしても、この喜ばしい事情は依然として我々に否定的な意味における第二の問題の解決に對する如何なる權利をも、如何なるそれに似たるものさへも、如何なる權利の影をも與へぬであらう。

ベ・スツルーウエ氏は我々に向つて、多分、ジグワルトからの引用およびその他二三の彼によつてなされた引用はどうあらうとも、カントからの引用は正に第二の問題に答へてゐると抗辯するであらう。この引用を一讀しよう。次がその全文である。

「一切の變化は……原因性の連續的活動によつてのみ可能的である……現象の中に現實的な差異のないのは、時間の量における如何なる差異も最小ではないのと同様である、かくて現實の新しい状態はその無かつたところから、その一切の無限の段階を経て發生する、それらの相互間の一切の差異は常にO及びA間の差異よりもより小である。」

註1 『純粹理性批判』エマ・エム・ソコロフ譯。エス・ペテルブルグ、一八四頁。ベ・スツルーウエ氏はカー・ケルバツハのドイツ版第二版から引用してゐる、それでは我々によつて引用された行句は一九四—一九五頁にある。

こゝで恰も實際に、『飛躍』は不可能的となり、我々の前に再び、既に歴史の中で生じたところの『飛躍』を我々はどうしたらいいかといふ甚だ厄介な問題が起つて来るかのやうに見える。しかし少しく考へるならば、この恐るべき引用も決して、わが『批判者』が考へてゐるやうにしかく恐ろしいものではないことが解るのである。

カントにおいて問題になつてゐるのは唯だ量によつてのみ、一が他から區別される状態に關してである。量によつてのみ相互を區別するところの連続的状态の系列は何を現はすか？ それは量的變化の系列を現はす。カントは、この系列は、その中においては飛躍が考へられないといふ意味において連続的であると言つてゐる。それは眞實である、と假定しよう。しかし如何なる關係をそれは、量的變化の質的變化への轉化に際して、飛躍は可能であるかどうかの問題に對して持つか？ 全く無關係である。この問題は少しも、我々がカントから量の變化の連続的過程における飛躍の不可能性について知りえたことによつては解決されない。上に我々は、ベ・スツルーウエ氏自身の言葉によれば、ヘーゲルの『定式』もまた變化の連続的性質を指摘してゐることを述べた。今や我々は、それは諸變化を正に彼等が量的に止まつてゐる限りにおいて連続的であることを承認するものであることを附言することが出来る。しかしそれは飛躍が量から質への轉化に際して不可避免的であることを宣言してゐる。若しもベ・スツルーウエ氏がヘーゲルを——が彼と共に正教的マルクス主義者たちをも、——反駁したいのだつたら、彼は自己の批判的打撃を正にこゝへ向けるべきであつた。彼は、量は質に轉化しな

い、若しくは、——轉化するとしても、如何なる飛躍もこの際起らないしまた起り得ないといふことを示すべきであつた。ところがベ・スツルーウエ氏は、『純粹理性批判』から、量の變化に際しては飛躍は不可能であることを語つてゐる引用をなすだけに止まつたのである。不思議な論理であることよ！ 驚くべき『批判者』であることよ！

註1 『若しも状態Bが状態Aから量によつて區別されるならば』云々。同所、ソコロフのロシア譯一八三頁（我等の傍點）

さらにカントは、現實の與へられた量は、變化の限界的楔機間のすべてのより小なる段階を經由して發生すると言つてゐる。しかし如何なる發生を、何物の發生を彼は念頭に置いてゐるのであるか？ この間に對して彼に斷然かう答へてゐる、發生するのは實體ではない、その量は自然においては常に不變である、が唯だ實體の新しい状態が發生するのである。よろしい。これを認めよう、そして自問しよう、果して新しい状態（實體の）の發生は唯一的に思惟されうべき發生であるか？ 果して新しい關係（實體の諸部分間の）は發生しえないか？ 發生することが出来るばかりでなく、絶えず發生してゐるのである。そして絶えず發生してゐるばかりでなく、カント自身が語つてゐるところの、實體の狀態の變化そのものゝ結果として、即ちその運動の結果として、不斷に發生しなければなら

ないのである。正にこの新しい関係の發生こそは、量が質に轉化し、「連続的變化」を「飛躍」にもた
らすところの領域なのである。

註I 同所、一八二、一八三頁、同じ譯書（再び我等の傍點）

三

酸素が水素と化合する時、新たに發生せる水の分子は、それと水素（若しくは酸素）の分子とを區別するところの、「あらゆる無限の段階」を通過するのであるか？ 我々はさう思はない。そしてさう思はないのは、水とそれを構成する諸要素との間の中間的「段階」を表象することが不可能であるといふ單純な原因によつてである。かゝる種類の連続性は思考されえない、それは「知力が許さない。」
尙ほ一つの例。與へられた國に労働日を一日九時間に制限する法律が存在すると假定しよう。しかし労働者たちは、彼等の労働がやはり長きに過ぎることを見出す、そして労働日を八時間まで短縮することを要求する。立法者は、遂に、彼等の要求を満足させる、そして譬へば何日から、次の年の一月一日からでも、八時間労働日は法律上の労働日となる。借用する、この場合新しい法律と舊い法律とを分つどんなかの「無數の段階」について語ることが出来るか？ 明かに、出来ない、かゝる段階は

存しなかつた、立法者は一度に労働日の限界を一時間だけ動かしたのである。そこには *salus*（飛躍）があつた、——云ふまでもなく社會的轉換ほどに大なるものではないにしても、——そして若しも我が「飛躍を許さないで」、「連続性」を言ふならば、直ちに、こゝではそれは存しなかつた、それ故に「こゝでは」知力はそれを「許さない」といふことを意識しなければならなくなるであらう。飛躍なしには「社會改良」においてさへも濟まないことになる。

尙ほ一つ、より多く「革命的」である例をあげよう。一八四八年二月二四日にパリ市會議事堂において共和制が宣布された。ベ・スツルーウエ氏は我々に、そこに六月の君主制と第二共和制との間の「無數の段階」が含まれてゐたのであり、そこに含まれたのであると言ふかも知れない。次第に軍隊の力を弱めながら、正にさうすることによつて漸次的に君主制の保存の機會を減じたところの、逆せるパリ市民の革命運動の中にはないのか？ しかし戰勝的な大衆的叛亂を、飛躍の不可能性の證明として引證することはあまりにも變なことであらう。これらの引證の助をかりてはベ・スツルーウエ氏は證明しなければならぬことゝは丁度正反對を證明することになるであらう。

カント自身「持續する」ところの、即ち存在し続けるところの對象のみが變化すると言つてゐる。發生は——消滅と全く同様に——決して發生し若しくは消滅するものゝ變化ではない。しかし若しもその通りだとすれば、又事實においてそれはさうなのであるが、——變化一般、従つて、漸次的な、連續的な變化もまた、對象の發生をも、消滅をも説明しないことは明かである。が若しも我々が對象

の發生をも、消滅をも説明することが出来ないならば、我々は一般に彼等を理解しないのであり従つて彼等に對する我々の科學的態度なるものはありえようがない。

註1 『變化とは同一對象のある存在の仕方に繼起するところの或る他の存在の仕方である。それ故に凡て變化するものは常性的である、變易するのは單にその状態である。』 (Kritik der reinen Vernunft, herausgegeben von Kehrbach 2 Auflage, S. 179. XX)

カントの謂ふ連續性は、ライプニッツが既に彼以前に *Loi de continuité* (連續律) なる名の下に法則に仕上げたところの連續性そのものである。しかしその同じライプニッツは、(choses composées) (組成物) を問題にする場合我々は時として小さな變化が極めて大なる作用を惹き起すことを、即ち、換言すれば、漸進性の中斷、飛躍を結果することを發見するのを認めてゐた。かゝる飛躍が不可能的であるのは、ライプニッツの言葉によれば、唯だ『單純なる事物』(à l'égard des principes ou des choses simples) においてのみである、何となれば飛躍は神意に矛盾するであらうからである。神意は暫く措き、我々は上に我々によつて引かれたすべての例は、正に choses composées の領域から取られたものであることを注意して置かう。その意味は、ライプニッツ自身『連續律』の見地から彼等に反對しないであらうといふことである。『反對しないであらう』なんて何を言つてゐるのだ！

我々は確信する、若しも彼が、或る次の時代の若干の哲學愛好者が彼の『法則』から如何なる使用をなしつゝあるかを豫見したならば、彼は彼等に對して或るどんなかの毒々しい但し書を添へたであらう、若しも常に多數であるところの、保守的な鷲鳥どもを怒らせるのを怖れさへしなかつたならば、この者どもの『知力』は久しい以前から『飛躍』を、特に社會的政治的關係と呼ばれる『複雑なる事物』に關して、我慢出来なかつたのである。

註1 ライプニッツの著述が手元にないから、イーペルツホーの《Grundriss der Geschichte der Philosophie》なりとも示して置かう。Berlin 1880, I, Theil, S. 130.

序でながら、『單純なる事物』においても飛躍の問題は、ライプニッツ及びカントにしか思はれたやうに決してさう單純にはなく解決されるのだといふことを注意して置かう。譬へばすでに我々に馴染である『純粹理性批判』の著者をとつて見よう。

彼は言つてゐる。現實の新しい量 (A-B) は A および B の楔機間に含まれる凡ゆる小段階の仲介によつて發生する。それがその通りであると假定しよう。そして上述の諸楔機の間にあるもの、中で一段階が他の一段階に直接的に續くところの二つの段階をとつて見よう。借問する、これらの二つの段階の間の差異に等しいところの現實のその量は如何にして發生するか？ この場合唯だ二つの假

定があり得る。(一)それは直ちに發生するか或は(二)それは漸次的に發生する。若しもそれが漸次的に發生するならば、それは、それ自身多くの中間的段階を通過することを意味する。しかしそれは我の課題の條件に矛盾する、何となれば我々は直接的に一つが他に續くところのさういふ二つの段階をとつたのであるから。従つて、第一の假定だけが残る。それに従へば我々によつてとられた段階の間の相異に直ちに發生する。がこの直ちにの發生こそは不可能であるかに見える飛躍の一つなのである。がこれは、知力が許容しないのは飛躍ではなくして、正に連続性であることを意味する。

飛躍は存しない、連続性のみが存すると宣言するテーゼは、完全なる權利をもつてその意味に従へば現實においては變化が常に飛躍によつて行はれる、しかし唯だ小さなかつ急速に一つが他に續くところの飛躍の例は我々にとつて一つの『連続的な』過程に融け込んでゐるのである、といふアンチテーゼに對立させることが出来る。

正しい認識論は、勿論、このテーゼとこのアンチテーゼとを一つのシンテーゼに融和させなくてはならない。我々はこゝで、如何に彼等を『單純なる事物』の領域において融和させることが出来るかを觀察してゐることが出来ない。それはあまりにも遠く我々を驅り立てるであらう。こゝでは我々には、我々が非常に屢々自然および歴史を研究する場合に當面しなければならぬところの『複雑なる事物』においては、飛躍は連続的變化を前提し、連続的變化は不可避的に飛躍に導くことを知りかつ記憶すれば充分である。これは同じ一つの過程の二つの必然的楔機である。頭の中でその一つを除き

して見よ、全過程は不可能的にまた思考されざるものとなるであらう。

註¹ しかし、こゝでは何よりも先づ運動の辯證法的性質を解明しなくてはならないであらうことを注意して置く。

註² ヘーゲルは久しい以前にすでに、自然は飛躍をなさないといふ通用の議論が如何に無力であるかを指示した。『凡そ實在一般の變化といふのは、——と彼は言つてゐる——ある大いさから他の大いさへの移行のみでなく、また質から量への、及びその逆の移行である。即ち徐次的なるもの、中止(斷絶)であり、先行の定有は時として質的相違であるところの變異であるといふことが明である。』(Wissenschaft der Logik. Hegels Werke, III Band, zweite Auflage, S. 474. XXII) ミッスルルーエ氏は彼によつて甚だ不成功的に各種の著者からやたらに引いてゐる引用が、ヘーゲルの思想を反駁してゐると想像した。事實においては彼等の中には反駁の影すらもない。ヘーゲルの飛躍説に關しては詳しくは我々の小冊子『獨裁の新しい擁護者、又はチホミローフ氏の悲哀』を見よ。

四

萬有は流轉し、萬有は變化する、——と『暗い』エフェソスの思想家は言つてゐる。萬有は流轉し萬有は變化する、——と辯證法的方法の支持者たちは繰返したしまた繰返しつゝある。しかし若しも

萬有が流轉し萬有が變化するならば、若しも現象が絶えず一つから他へ移り行くものであるならば、一つの現象を他の現象から區別するところの境界を確保することは必ずしも常に容易でない。『我々は譬へば——とエンゲルスが言つてゐる。——日常生活においては確信をもつて、與へられた動物が存在してゐるか否かを語ることが出来る。しかし尙ほ精確な研究に當つては我々は、それが時として甚だ複雑なる問題であることを確信するのである。その困難は母親の胎内の子供を殺すことが殺人であるかどうかの合理的な境界を發見しようとして徒らに苦しんでゐる法律家たちがよく知つてゐる所である。同様に死の瞬間を正確に決定することも不可能である。何となれば生理學が、死は急激な瞬間的な作用でなくして、極めて徐々に行はれる過程であることを示してゐるからである。凡ゆる有機的存在は各々の與へられた瞬間において以前にあつたと同じものであり、そしてそれと共に同じものでない。各々の與へられた瞬間において彼は外部から受取られる物質を變形し、内部から他の物質を排出する。彼の有機體の或種の細胞は死滅し、他の細胞が新たに生れる。かくて、或る時期を経たる後には、與へられた有機體の物質は完全に更新され、原子の他の組立によつて替へられる。それ故にこそ各々の有機的存在は常に同じものであつて、また、同じものでないのである。』

ベ・スツルーウエ氏は、云ふまでもなく、彼にはこれらの考察がよく知られてゐるのであるが、正教的マルクス主義者たちの言葉尻を捉へようと欲してゐる。彼は彼等を、事實においては單になだらかな従つて殆ど認められない推移のみがありうる所に深淵を見出すことが出来ると期待してゐるとい

つて批難してゐる。彼は社會的轉換に關する彼等の議論を合理的な理論的根據を失へるものと宣言してゐる。それは正に鋭い——現實には在りえない——二つの社會的形態、資本主義的と社會主義的との分界を意味するであらう。

しかしかゝる論證をもつては、まだ自己の世界觀において辻褄を合はせる暇のなかつたマルクス主義者のみを迷はすことが出来るばかりである。自己の理論の基本的命題を考へ抜いたマルクス主義者は、事實において發展は『批判者』諸君の欲するのとは全く異つて行はれることを知つてゐる。若しも私が加熱が氷を水に、また水を——蒸氣に轉化するのを見るならば、私はこの場合漸進的變化によつて準備される飛躍を認めまいとするには多くの努力をなさねばならないであらう。勿論、かゝる飛躍はどこにでもあるものではない。しかしそれがないところにおいてさへも、我々に飛躍と思はれるものが實は漸次的な、しかし我々には氣付かれない推移の一系列であるやうなところでも、これらの場合においてさへも、我々は屢々我々の追求しつゝある一定の目的のためには、充分な精確さをもつて諸現象を區別する可能性を持つのである。すなはち、死は多かれ少かれ徐々に行はれる過程であつて、急激な作用でないにしても、我々は矢張り最も多數の場合において生者と死者とを識別しうるのである。若しも我々が、イワンが斧をもつてセミヨンの首を斬るのを目撃するならば、我々は誤謬を冒す氣づかひなしに、彼は殺人を行つてゐるのであり、イワンの首を斧で斬り落すことは彼の生命を斷つことであるといふことを言ひうるのである。社會的政治的現象の領域においても同じことであ

る。社會進化は全くその諸機として現はれるところの社會革命を排除せぬのである。新社會は『舊社會の胎内において』發達する。しかし『出産』の時が来る時、その時發展の徐やかな行程は中斷され、そしてその時『舊秩序』は、それが自己の『胎内』と共に消滅するといふ單純な原因によつて、新しきものを自己の『胎内』に閉込めて置くことを止めるのである。これこそは我々が社會革命と呼ぶところのものである。若しもベ・スツルウエ氏が社會革命に關する明瞭な表象を持ちたいと欲するならば、我々は更に彼を、フランスにおいてかくも長い間その内部において第三階級が發展したところの（ancien régime）（舊制度）そのものゝ存在に終末を與へたところの偉大なる社會的轉換に向けるであらう。スツルウエ氏は、資本主義的秩序にはかゝる急激なるまたかゝる強制的な死は運命づけられてゐないと考へてゐる。我々は彼が都合のいゝやうに考へることを妨げぬであらう。しかし我々は自己の意見を辯護するために彼の味も素氣もない『連續性』に關する考察よりも何かもつと確實なものを提供してくれることを彼に希望しよう。

しかしわが『批判者』のこれらの論證は論理的な意味において無力であるとしても、彼等は心理的關係において甚だ興味である。そしてこの方面からそれをエ・ベルンシュタイン氏の二三の論證と對比することは甚だ興味あることである。

エンゲルスは自著『ルードウィヒ・フォイエエルバッハ』において、世界は事物およびその知的形象、即ち概念が連續的な變化の中にある諸過程の總括であると言つた。エ・ベルンシュタイン氏はエ

ンゲルスのこの命題を自己の『批判』に附することが必要であると考へた。彼は宣言した、『原則におして』(prinzipielle) 彼は『勿論』この命題を正しいもの (sicherlich, richtig) と認めてゐる。しかしその根底に横はつてゐる思想がどの程度まで確かであるか (welche Tragweite dürfen wir dem ihm zu Grunde liegenden Gedanken beilegen) また不斷の變化——なる言葉をどう解釋しなければならぬかについて疑ひを持つのである。何が正に疑はしく思はれたかを説明する爲めに、ベルンシュタイン氏は次のやうな例を引いてゐる、生理學者の教ふるところに據れば、人間的有機體の組成部は絶えず變換する。しかしそれにも拘らず、彼は以前と同様の個性として止まつてゐる。成程、彼は老年になり、變化する。彼は發達する。しかし彼の發達は彼の有機體の諸特性によつて規定される。従つてそれが遅らされ又は促進され得たとしても、しかしそれは如何なる場合にも、與へられた人間から全然別種の存在が受取られるやうなことに立ち至らぬであらう、この基礎においてエ・ベルンシュタイン氏は、上に引かれたエンゲルスの命題は次のやうに、すなはち世界は既成の事物および諸過程の總括である、と變へなければならぬと考へた。我々はその中において、その完成のために一秒を要しない過程を見る。しかし同時にまたそのために數百年若しくは實際の見地からすれば永遠と名付けることの出来る數千年さへも必要であるやうな過程をも見る。研究および記述の或る一定の目的の爲めには、時として事物の若干の特殊の特徴から遠ざかることが出来るばかりでなく、またさうすることが必要でもある。しかるに辯證法的定式は、——とベルンシュタイン氏は考へてゐる、——それ

が全く許されないか又は或る一定の範囲内においてのみ許される場合にさへもかゝる抽象に目醒ますのである。そしてこゝに辯證法的定式の危険性は含まれる。

我々はこので、どれだけベルンシュタイン氏によつて爲された修正がエンゲルスを修正するかの問題に觸れることを欲しない。我々はまたベルンシュタイン氏の「批判的」考察の驚歎すべき、純専門學校的幼稚さについても言及しないであらう。マルクス主義の哲學的および社會學的基礎の「批判者」としての彼の主要なる特殊性は、一般に批判對象に對する彼の無理解にある。しかし茲では我々にはそれは何の關係もない。我々に必要なのは唯だベルンシュタイン氏によつて爲されてゐる、一般的には辯證法に對する、また部分的には——マルクス主義者に對する批難の意味を闡明することである。がこの批難は、彼等が事物の特殊の特徴を充分に考慮してゐないといふことに歸せられる。これを認めたと後に、ペ・スツルーウエ氏が正教的マルクス主義者たちを何故に批難してゐるかを想起しよう。

註1 彼の「批判的」勝利については我々の論文「カントに背く Cant 又はベルンシュタイン氏の遺言書」を見よ。

彼においては、これらの人々はあまりにも自己の注意を資本主義、社會主義なる對立的概念の特殊の特徴に集中し過ぎて、社會生活の諸形態の漸進的なるまた連續的なる發展を忘れ、辯證法を變質し

てゐると云ふことになつてゐる。

註1 Archiv, S. 638.

かくて我々は二つの正反對な批難に當面する。ベルンシュタイン氏によれば、正教的マルクス主義者たちは發展のために既成の事物を見ない。スツルーウエ氏によれば、彼等は鋭く區別された概念の故に發展を見てゐない。ベルンシュタイン氏によれば彼等はあまりにも辯證法に忠實過ぎる。スツルーウエ氏によれば彼等は充分にそれに忠實でない。

これら二つの批難は同一の源泉から出たものである。すなはち辯證法についての正しくない表象に由來するのである。

ベルンシュタイン氏は、辯證法はヘーゲルが「悟性の権利」と名付けたものを考慮に入れてゐない、即ち諸概念の精確な規定について考慮してゐない、と何故か考へてゐる。ペ・スツルーウエ氏は、「悟性の権利」を考慮することは辯證法を變更することを意味する、と何故か想像した。

辯證法的に思想することの出来る人々の特殊性は實に、彼等がその何れの缺陷からも自由であることにある。彼等は、各々與へられた「事物」の發展はそれの否定と他の「事物」への推移に導くことを知つてゐる。しかし彼等は又同様に、一物の他物へのこの推移の過程は我々の爲めに我々が相互を

區別し、それらについての我々の概念をして一つの無差別な全體に融合することを許さない時にのみ理解されるものとなることをよく知つてゐる、事實において問題は正に同一の事物の不斷の變化についてではなく、異なる事物の發生にあるのではないか。ヘーゲルの言葉をもつて現はせば、辯證法的方法に忠實に止まるところの者は、唯だ理性にも悟性にも當然の價値を認めうる者である。「理性」の權利を忘れる者は、形而上學者となる。「悟性の權利」を見のがす者は、懷疑論に落ち込む。

註1 これについてはヘーゲルの『大』エンサイクルペディア、第八十一項およびそれへの補遺を見よ。同様にまた『Die Phenomenologie des Geistes』, Bamberg und Würzburg 1807 一三四頁および以下を見よ。ヘーゲルは非常に美事に『或るものは否定の第一の否定である』と言つてゐる (Werke, III, S. 114, XXI/A.)

辯證法的方法の支持者たちは「悟性」の權利を輕視してゐると想像しつゝある者は、上述の權利に對する慎重な態度の中に辯證法の變更を見てゐる者と同様に、この方法の眞の性質を理解してゐないのである。第一の場合はベルンシュタイン氏の場合であり、第二は——ベ・スツルウエ氏の場合である。

しかしながら、スツルウエ氏およびベルンシュタイン氏はすべてこれに何の係りがあるか？ 所謂マルクス主義の批判が何等か眞面目なる理論的要求を満足させようとしてゐるものであると想像す

るならば、非常な誤りであらう。理論は「批判者」諸君には、實は、殆ど用がないのである。彼等に必要なのは或る實際的な傾向、すなはち前衛的プロレタリアートの革命的傾向を刈り取り若しくは少しでも弱めることである。彼等の「批判」は彼等の爲めにこの傾向との「精神的闘争」における武器として役立ち、従つて彼等の議論は彼等の眼には、それが彼等の憎むべき概念、社會革命を容赦なき照明の中にさらすことを助ける限りにおいてのみ價値を持つてゐるのである。この實踐的目的はすべての理論的手段を正當化する。若しも一人の「批判者」が正教的マルクス主義者に對して、同時に他の「批判者」によつて彼等に對して進められる批難と全く非兩立的な批判を進めるとしても、そこには矛盾がなく、統一における多様があるばかりである。兩「批判者」は相互にカルタゴ人を、即ち概念、社會革命を撃破しなければならぬといふことにおいて一致してゐる。そしてこの事情は彼等を同意見者となし、彼等の間に相互の同情を創造してゐる。が如何なる口實をカルタゴ人を撃破する爲めに撰ぶかは——それは各人が各個に、彼自身によつて撰擇されてゐる口實が、その同盟者たちによつて撰擇される口實の一切の意味を喪失せしめることには、少しも當惑することなしに、決定するのである。「批判者」諸君が「陳腐」に反對するのは當然である！

理論的には、ベ・スツルウエ氏によつて擁護されつゝある進化論は、我々が見た様に、その中には新しい事物の發生の爲めではなくして、既に發生せる事物の變化の爲めのみ場所があるといふ根本的な缺陷を持つてゐる。しかしこの缺陷に對して、ベ・スツルウエ氏自身も、またすべての、

ロレタリアートの社會革命的突進を「精神的武器」をもつて刈り取らうと努めてゐる、學識あるまたは半ば學識ある大小ブルジョアジも好んで目をふさいでゐるのである。上層階級のイデオログ達を翻弄しつゝある保守的な階級本能が、今やブルジョア「認識論者たち」を翻弄しつゝある。それが彼等をして自己の多數のかつ絶叫的な理論的誤謬を誇り、孔雀が自己の華美な尾を張り擴げるやうに擴げ、そしてかゝる誤謬から免れてゐる人々を眼下に見下させるのである。

五

諸君は多分我々に、ペ・スツルーウエおよびエ・ベルンシュタイン兩氏の保守的本能を言ふことは出来ない、何となれば社會革命に對する彼等の態度はどうあらうとも、彼等はやはり社會改良の決定的な支持者として進出してゐるからである、と言ふであらう。しかし問題は正に、社會改良の斷然たる主張は現在においてブルジョアジの保守的本能と最もよく折合つてゐることにあるのである。

譬へば、ウエルナー・ゾムバルト氏に耳を傾けよ。

『現世紀の半ばにおいて最も明快な頭腦を捉へた思想、——と彼に言つてゐる、——近き將來において資本主義的企業を必要としない社會的生産の可能性に關する思想、この思想は我々の時代においては唯だ社會的夢想家たちの死滅しつゝある世代の代表の中にのみ生きてゐる。今や我々は、企業家たちが徐々なる有機的過程によつてのみ餘分なるものとなりうることを知つてゐる……尙ほ全數世紀間

に亘つて資本主義の緊張的な事業は繼續するであらう……そして我々は満足をもつて尙ほ長く我々の經濟過程の首腦に、今日に於ても社會生活を指導しつゝある人々、天才的な企業家、商人、それと殆ど同等の重要な意義を有する大株式會社の社長、更に——我々の國家、都市、地方經濟の指導者たちを見るであらうといふ見通しを歓迎するものである。』

註1 『どんなことがあらうとも！』職業運動の理論および歴史からして。『クレーマンの著書「職業運動」のロシア譯への附録に載せられたドイツ語からの翻譯、エス・ペテルブルグ一九〇一年、九五—九六頁。

經濟過程の首腦に帝國の商人、株式會社の社長、天才的企業家、等々を見る見通しは、すべてこの尊敬すべき同胞を賃労働搾取者達の「首腦」と見る見通しと全く不分離である。『満足をもつて』一つの見通しを迎へる人間は、満足をもつて他をも迎へる。かゝる人間は、疑ひもなく、ブルジョアジの見地に立つものである。彼にはその利害が大切なのである。彼等の自己保存の本能は彼の口を藉りて語つてゐるのである。しかも、それにもかゝらず、彼は熱烈に「社會主義」を擁護してゐる。

『しかしこのことは決して、——と彼は主張する、——現代の資本主義の活動の廣大なる局面の前に社會主義的理想が頭を垂れなければならないことを意味しない、寧ろ反對に、正に資本主義的過程においてのみ彼等は實現の可能性を受取るのである。このことは、我々が生産及び市場的流通の兇暴な

る自然力をカルテルの合同の力によつて計画的に支配することを社會主義的理想と考へる場合にも、また我々が所有の利害に反對して労働の利害の擁護を第一に掲げる場合にも正しいのである。最後の思想は支配的經濟秩序の漸次的な改造によつて到達される。こゝへは工場法、國營労働保險および一般に雇傭に關する初等的な私法的契約の場所に公法的關係をつかしめるところの立法および行政上の一¹⁾切の改革が關係する。』

註1 同所、九六頁。ウエ・ゾムバルト氏の傍點。

『所有の利害』即ち資本家的所有の利害、ウエルナー・ゾムバルト氏がかくも長きに亘る支配を預言してゐる所の、それらの商人たち、株主たち、及び企業家たちの所有の利害とは何であるか？ それ——賃労働の搾取の利害である。この所有の利害に對して賃労働の利害を擁護することは、資本家による労働者の搾取の水準を引下げることを意味する。借問する、この水準は、資本主義の漸次的な『去勢』の理論の支持者たちが耳を聳するほどに吹き立てゝゐるところの、労働對資本の關係における改革のお蔭で、引下げられるであらうか？ 否、今日に至るまでそんなことは無かつた！ それどころか、すべてこれらの改革にかゝはらず、労働者階級の社會所得における相對的分前はすべての先進資本主義諸國において減少しつゝあることが非常によく我々には知られてゐる。しかしこれは労働者階

級の搾取の水準の上進とその資本家への隷従の増大とを表示する。従つて、上述の改革は全く何等の本質的な變化をも資本主義的生産關係に持込むことがなく、また少しも資本家的所有の本質的な權利をも制限せぬのである。そして若しも今日すべてのありうべき『社會主義』がかゝる改革に歸せられるならば、『社會主義的理想』は最もよく資本主義的基礎において實現されるのは少しも驚くに足らない。資本主義諸國の先進的工業ブルジョアジーは既に久しい以前において、かゝる『理想』の實現が彼等にとつて有害にあらざるのみならず、著しい利益をもたらすことを理解してゐる。それ故にこそ、かくも斷乎として以前に勞賃關係への國家の干渉と労働者の職業組合に對して反抗した彼等が、今や、自から干渉を要求し、かゝる組合の發生を助成しようとしてゐるのである。彼等は、——労働組合制度のブルジョア的ピンダルの表現する所によれば、——『大機械工場における労働力の小賣は無意味であり愚劣である』ことを理解した¹⁾。そして今や彼等の政論家たち及び彼等の學者たちはこの種の『社會主義』の確信的な宣傳者として進出してゐるのである。²⁾

註1 Paul Bureau—《Le Contrat de Travail, le Rôle des syndicats professionnels》, Paris 1902, p. 257.

註2 尤も、最近イギリスに於ては労働組合に對するブルジョアジーの社會的輿論關係が著しく變化し始めてゐることを注意して置かなくてはならない。今や《Justice》の殆ど毎號が労働組合との『戦争』(《The war on Trade Union》)の進展に關する新しい報道をもたらしてゐる。イギリスのブルジョアジーは、労働組合は

世界市場において他の諸國と成功的に競争することを妨げるといふ思想に立戻りつゝあるかに見える。若しもこの『労働組合との戦争』が近い將來に終熄しないならば、イギリスのブルジョアジーの『社會主義』は、これすらも、一切の悪氣なしに、唯だ暫く、唯だ或る限界内においてのみ、資本主義と折合ふことが出来たといふことを示した後に、傳説の領域に立去ることとなるであらう。

『蝦蟇はどこで冬眠するか』を非常によく知つてゐる學識あるブルジョアの資格に於てウエルナー・ゾムバルト氏は極めて雄辯に資本主義の基礎における社會主義について論じてゐる。しかし讀者よ、この社會主義こそはエ・ベルシュタイン、ベ・スツルーウエ、e tutti frutti (及び猫も杓子も) がかくも執拗に勸説しまたかくも一生懸命に誇張してゐるところの有名なる『社會改良』なのである。

我々は、ウエ・ゾムバルト氏の『社會主義的理想』が、わが『批判者』の社會改革的計畫を完全に蔽ふものであるとは言はないであらう。二三の點において彼等が意見を異にすることはあり得べきことである。併し我々は確信をもつて、ウエ・ゾムバルト氏の『社會主義』がベ・スツルーウエ氏の『社會改良』と異なるのは、同一種の二つの變種が互に異なる以上でないことを斷言する。それは——同一の題目の異本である。そして正にそれ故にこそベ・スツルーウエ氏がかくもウエ・ゾムバルト氏を上げ、それに對してウエ・ゾムバルト氏がかくも大なる希望をベ・スツルーウエ氏の『新マルクス主義』に懸けてゐるのである。¹⁾ 漁夫は遠方から漁夫を見る。そして二人の漁夫は同じ階級本能によつて指導

されてゐるのである。

註1 彼の著述の第三版《Sozialismus und soziale Bewegung im XIX Jahrhundert》, Jena 1900, S. 126-127 を見よ。

自己の有名な書物においてベルヂャーエフ氏はベ・スツルーウエ流の『批判者』諸君に固有なる、資本主義社會の漸次的改造についてのこの表象を美事に表現してゐる。『資本主義的發展そのものによつて創造される修正は、——と彼は言つてゐる、——社會的組織が全く更新されるまでは現存社會の破れ目を繕ひ續けるであらう。』これ以上美事に表現することは不可能である。禍は唯だ與へられた表象を成功的に表現することが未だそれから誤謬の要素を除去することを意味しないことである。舊きもの、努力的な修繕の結果としての新しい『社會的組織』の發生は、『批判者』諸君によつて承認される唯一の、量から質への轉移の場合である。しかしこれは疑はしき場合である。若しも私が靴下を繕ふならば、それは靴下となつて、その『組織』が全然更新されるやうな極端な場合にさへ決して手袋には轉化せぬであらう。資本主義社會の穴の修繕においても同様である。資本主義的生産方法は封建的・組合的構成の除去によつて確立されたのであつて、それを修繕したことによつてではなかつた。従つて、如何にしてまた何故に資本主義的『組織』の修繕が(最も緩慢なる變化によつても)資本主義

的、生産關係の除去と、その社會主義的、生産關係によつての變更に導くことが出来るかまた導かなくてはならないか、全く不可解である。ベルヂヤーエフ氏によつて使用されつゝある形象的表現は尙ほ一層『批判者』諸君によつて擁護されつゝある進化説の無力を色濃くしたに過ぎない。我々は既にそれが新しい事物の發生ではなくして、既に存在する『事物』の變化のみを説明することが出来ることを見た。今や我々は明瞭に、それが唯だ、その『理想』なるものが資本主義社會の穴の『連續的』修繕の範圍を越えることのない人々にとつてのみ理論的指導として役立つことが出来るのを見る。新しい社會秩序を創造しようとする努力しつゝある人々には、それは、よく言ふやうに、全く何の役にも立たぬ、これは正に全く異なる結論に、『理想』に、及び、——これが最も主要なのであるが、——實踐的任務に導くところの理論に對立して置かれたる、ブルジョアの社會改良の理論である。

註1 『主觀主義と個人主義』二六〇頁。

『連續的な』古着の繕ひ、そして同様に『連續的に』この際、繕はれた古着が、何か全く新しいものに轉化すると『連續的に』想像することは、それは公然とそして『連續的に』人間の思想の一切の法則を嘲笑する如き奇蹟を『連續的に』信ずることを意味する、そして正にかゝる、理論的に眞に不自然なる豫言者として現はれてゐる信仰を、今や正教的マルクス主義の空想主義なるものに反對して押立

てゐるのである！ おゝ、『批判者たち』よ！

事實において空想家であるのは正教的マルクス主義者ではなくして、正に『修繕』の理論家たちである。しかしこれらの理論家たちの空想は全く特別な、新しい性質の空想である。社會的教義の歴史にはかゝるものは未だ曾て存しなかつた。『修繕』の奇蹟力に對する信仰は『批判者』諸君の頭の中で——ゲイ・ウスペンスキイがどこかで表現してゐるところによれば、未來の歴史時代においては郵便切手がきつちり一コベツクだけ安くなるであらうといふことの喜ばしい自覺に聰明にも満足してゐる所の、打破り難い抜くべからざる『酩酊』と平和に折合つてゐるのだ。それ許りではない。この空想はこの酩酊なしには、『下』が『上』なくしては、積極が消極なくしては考へられないと同様に、考へられないのである。修繕の理論家たちの町人的な醉拂つた『本能』は、遠い未來における郵便切手の下落以外の他の如何なる『飛躍』をも『許さない』。そして彼等は無條件的に自己の本能の聲に實踐的行動に關する一切において聽従してゐるのである。實踐においてはその要求が『修繕』の圖式により完全に都合よく組上げられ、ばられるほど、それだけ満足する意識的日和見主義の時代が彼等によつて始められた。しかし、自己の生眞面目さの傲慢な意識が彼等を捉へることが多くなるに連れて、彼等には空想を愛撫することが許されてゐるといふことに對する確信が一層動かないものになる。そして今や彼等は勇敢にも、補布に次いで殖されゆく補布が新しい『社會的組織』を與へ、郵便切手の下落は黄金時代の到來を表示するであらうことを信ずることを自分に許してゐる。しかし『批判者』

諸君の信仰はまた普通の人間の通俗的な盲目的な信仰には似てゐない。それは骨の髄まで不信に貫かれてゐる、何となれば『批判者』諸君は彼等自身が理論的に無力であると宣言してゐるところのものを信じてゐるからである。それは——カント主義者だけが持ちうる信仰である。かゝる『信仰ある』人々の心理は決してゴゴリのポドコロシンの心理を思ひ出させない。この人物は心の奥深い所で彼は結婚する気がすこしもなくまた決して結婚しないであらうことをよく知つてゐる。彼の結婚生活の束縛に對する嫌悪は如何なるコチカレフも如何ともし難い。しかしこのことは彼に次のやうに言ふことを妨げない、『つまりそんな風に退屈まぎれに考へ出すと、遂には確かに結婚をしなければならぬことが解るのである！ 實際のところどうなるだらう？ 生きて、生きてゆく、そして遂に醜惡になる……本當に、自分でも羞づかしくなるほどだ……』相違は唯だ、ポドコロシンが新學派の改革者諸君の有する『批判的』教養を持つてゐないといふことにある。自分自身の言葉の影響によつてポドコロシンは時々にもせよ、暫くにもせよ『婚約者』となつてゐる。しかるに、『批判者』諸君は斷然『修繕』以上には進まぬのである、何となれば社會的組織の更新は空想であるといふ思想が斷然彼等を棄てないからである。若しも『批判者』諸君が『批判的』恩恵をもつて祝福されなかつた自己の讀者を嘲笑してゐないとしたら、若しも彼等が眞實に、彼等自身の言葉によれば、信ずることが不可能であるところのものを信じてゐるとしたら、我々は極めて興味ある『二重心理』の場合をこの際持つのである。

『各々の社會主義者は、——とベ・スツルーウエ氏は書いてゐる。——道德的政治的理想からのやうに、社會主義から出發する、社會主義は彼にとつて、その助をかりて彼が個々の事件および行爲者を道德的・政治的評價と測定とに附するところの規制觀念である。黨に組織された……唯一の道德的・政治的主體として進出するところの全體としての階級に對してはそれ以外ではありえない。社會民主主義的運動は終局的理想に従屬させられなければならない、さうでなければ運動は解體するであらう。終局的の信仰は社會民主黨の宗教である、そしてこの宗教は——決して『私事』ではなくして、最も重要な黨の社會的關心である。』

註1 Archiv, S. 698-699.

そしてそれは理論的には、『終局的』は——空想であるといふことである！否、何と言はうとも、かゝる『宗教』は『二重心理』なしには不可能である。しかし我々社會民主黨員は正氣であり、我々は『二重心理』に苦んでゐない、従つて我々はベ・スツルーウエ氏の『宗教』がすこしも必要でない。我々は彼の『規制觀念』に對して大いに感謝する、しかしそれは我々には要らぬのである。我々が自己の終局的について語るのには、我々がそれを『我々を高める欺瞞』と考へてゐるからではなくして我々が固くその實現の不可避性を信じてゐるからである。實現すべからざる理想は我々にとつて理

想でなく、單なる不道德な愚劣に過ぎないことは當然である。我々の理想、革命的社會民主黨の理想それは——未來の現實である。その實現に對しては現代の社會的發展の全行程が我々に保證する、そしてそれ故にこそその未來の實現に對する我々の確信は我々の見るところでは、我々および『批判者たち』に共通な、今日『沈んだ』太陽は、明日『登る』ことを怠らぬであらうといふ確信もまたさうであるやうに、何等の血縁的なるものを「宗教」に對して持たぬのである。それは——多かれ少かれ誤謬なき知識であつて、決して多かれ少かれ宗教的な信仰ではないのである。

六

しかし何故にわが『批判者は』かくも強固に我々の『終局目的』が我々にとつて唯だ『信仰』の對象であるに過ぎないと信じてゐるのであるか？ 何故に彼はそれについて空想の可成りの塊りに對する我々の『神聖なる權利』のためにのみ語ることを許してゐるのであるか？ 何となればそれを言ふ場合、我々が現實主義の地盤を放棄するからである。

が現實主義とは何であるか？ それは——ベ・スツル・ウエ氏によつて再吟味され、修正され、純化され、補足されたところのマルクス主義である。

『この論文において述べられた現實的な見解は、理論的偽概念『社會革命』に働きかける非現實的な見解と同様にマルクスの思想に、及び特に不斷に行はれつゝある法律と經濟との適應に關する史的唯物論

の根本命題に、基礎を置いてゐる。マルクスがマルクスに反對してゐる。』

第1 Archiv, S. 690.

わが『批判者』の批判に獻げられた論文の第一において、我々は如何に不具的に拙劣にベ・スツル・ウエ氏が經濟および法律間の原因的依存關係に關する史的唯物論の『根本命題』を理解してゐるかを示した。この論文を注意して讀んだ者は『批判者』君の『現實的な見解』が『根本的』誤解に基づいてゐることを知つてゐる。がそれを知つてゐる者は、我々の『終局目的』の『現實的』批判から何を期待することが出来るかを理解する。しかしこの批判をも詳細な注意深い批判に附することはすこしも妨げない。

ベ・スツル・ウエ氏は不當にも經濟の法律に對する關係についてのマルクスの教義を史的唯物論の根本命題であると言つてゐる。事實においてそれはこの理論の根本命題の一つであるに過ぎない。それと並んで、人々の見解および感情に對する、及び人々が自己の歴史運動において自から課するところの目的に對する經濟の關係についてのマルクスの教義を置くことが必要である。

何故にこれらの目的の中の或るものは我々に空想的に思はれるか？ 一般に『現實性』の規範は何に含まれるか？ ベ・スツル・ウエ氏の言ふ所を聞かう。

『運動は歴史的 Prins(核心)である、——と彼は言つてゐる、——社會主義はそれが「現代の經濟秩序そのものによつて」生み出される運動の中に含まれてゐる限りにおいて現實性を獲得する。』

社會主義は現代の經濟秩序によつて生み出される運動の中に含まれる。またそれがその中に含まれてゐる限りにおいて、それは『現實的』である。よろしい。しかし如何にして社會主義は上述の運動の中に含まれるのであるか？ このことは二様に解釋することが出来る、(一)或は、社會主義は運動に参加してゐる者達の見解および感情の中にそれが含まれてゐる限りにおいてそれに含まれるか、(二)或は、それは運動の参加者達が與へられた時において彼等の見解及び彼等の感情に照應して彼等を圍繞する現實を改造することに成功する限りにおいてその中に含まれる。若しも我々が第一の解釋を採るならば、我々は、社會主義は現在の歴史的秩序によつて作出される運動の参加者達がそれに向つて突進する限りにおいて、即ち正にそれが彼等の『終局目的』として現はれてゐる限りにおいて、『現實的』であるといふ結論に到達する。これは全く論理的な結論である。しかしそれはわが『批判者たち』から現代の社會民主黨の終局目的を空想と名付けるべき一切の權利らしいものを奪ふ、この目的に向つての突進は疑ひもなく今日『作出されつゝある運動』等々に關係してゐる人々の大多數の見解および感情を一色に塗つてゐるではないか。

が第二の解釋は我々を如何なる結論に導くか？ 社會主義はそれが現在の瞬間において即ち正に我

我が讀者諸君と共にその現實性『そのもの』について議論をしてゐる場合に實現されうる限りにおいて現實的であるといふ結論に導く。この時間の中に實現されえないところのものはすべて空想である。結構である。しかしかかる場合には空想の領域には現代の社會民主黨の終局目的ばかりでなく、彼の現在の勢力をもつてしては實現されえないところのすべての目的もまた入れられなくてはならない。かくて空想の領域は甚しく擴大され、『現實的』活動の領域は、反對に、甚しく狭ばめられる、それのみならず、ある目的、それがどのやうなものであれ他の如何なる目的にも無關心であると云ふ目的、この目的より外の如何なる目的でも立てる處の凡ゆる社會運動家は、皆空想家である、と云ふことになる。一切の他の目的は必須的に未來に適合する、一切の他の目的は不可避免的に現在に對する不満足を前提してゐる、従つて、既に與へられた個人がそれを目的としてゐるその事實が、明かに、この個人が今日存在する社會的諸力の相互關係のお蔭で現在起つてゐるところのものに満足してゐないことを示してゐる、一切の他の目的はこの相關をそれ或は他の方向に變へようとする意向を表示する、一切の他の目的は、かくて、『現實性』の埒外に飛び出す。これもまた全く論理的な結論である。しかしベ・スツルーウエ氏および彼の『批判的』同意見者たちはそれを爲してゐない。彼等はこの結論から不可避免的に流出するところの『現實性』の『根本』條件に對して正にさういふ見解を抱いてゐながら、しかも彼等は自己の思想を最後まで考へ抜くことをしてゐないのである。彼等は途中で立停まつて、そして事物の現存的秩序に不満足でありながら、自己の『改良家的』努力において『穴の修繕』

以上に出ることを敢てしないところの『社會主義』を『現實的』であると認めてゐるのである。この際その解決の爲めに資本主義的生產關係を除去しなければならないところの一切の任務は自然空想的なるものとして現はれる。

今や、我々がどこに我々によつて求められつゝある『現實性』の規範があるかを知つた以上、我々は他の尙ほ一層『呪はれたる』問題に當面する。それはこの規範が眞實の——『批判』によつて歪められなかつた——マルクスの人類の歴史的運動における目的についての教義に適合させることが出来るかどうかといふことである。

この問題に對しては我々は否定的に答へなければならぬ。ベ・スツルウエ氏は我々に向つて多少異なる形においてゞはあるが、最も明瞭に『クレード』の中に表現されたところの、そしてそれは、我々の終局目的は唯だ、全労働者階級が、自己發展の過程によつて、即ち革命的『バトルス』との一切の關係なしに行はれるこの過程において、その利害はこの目的の急速なる實現を要求してゐるといふ確信に導かれるであらう時にのみ、空想であることを止めるであらうといふ思想の、異なる調子の（しかし常に『物識りの學者的な形式をもつた』）繰返しに歸せられるところの、概念の似而非現實的な混亂を提供しつゝある。

この概念の混亂は、數年前に我々の中の可成りに多くの者を迷はしたのであるが、若しもこれに專心しつゝある人々が、最も冷靜なまた最も誠實な眞面目さを持たなかつたならば、『Zur Kritik der

politischen Oekonomie』（經濟學批判）への有名な序文に對する最も意地悪いもぢりと考へられ得るであらう。

註1『ラポーチエ・デーロ』編輯局への我々の照會を見よ、ゼネバ、一九〇〇年。

七

彼等の迷妄の源泉となつたのは上述の序文からの次の箇所である、『如何なる社會的形態も、その内部に包含せる總ての生産力が充分發達した後でなければ、決して亡びるものではない。そしてより進歩した生産關係が出現するには、それを實現すべき物質的條件が既に舊社會の翼の下に孵化されておらねばならぬ。故に人類は常に解決しうべき問題のみを提起するものである。より精密にこれを考察すれば、凡そ問題なるものは必ずこれを解決すべき物質的條件が既に存在するか、あるひは少くとも發生しかけてゐるところにのみ生ずることが知られる。』

人類は解決しうべき問題を提起する。従つて、若しも彼が未だ或る問題、——譬へば、資本主義的生產關係の完全なる廢除の問題を提起しなかつたとすれば、それは、この問題が未だ解決されえないものであることを意味する。されば、現在にとつて解決されない問題の解決に突進することは、唯だ現實的な地盤を放棄して空想の領域に落ち込む者のみがなしうる所である。

かく多くの『批判者たち』は論じてゐる、そして一度この見地に固着した以上、彼等は最早大なる困難なしに社會民主黨の綱領において『現實的』な要素を『空想的』なそれから區別することが出来る。經濟關係の再建の事業における現代人類の急先鋒として今日現はれてゐるのは、周知のごとく、労働者階級である。現在彼等がその解決に従事しつゝある實踐的問題はそれならば何であるか？ それは労働日の短縮、労働の衛生的條件の改善、職業組合、協同團體の組織、等々である。資本主義的生産關係の除去はまだプロレタリアートによつて實踐的な日程問題としては掲げられてゐない。このことは正に、この問題の解決に必要な物質的諸條件がまだ準備されてゐないことを示すものである。

成程、プロレタリアートの中には、生産手段および生産物の流通の社會化を目差して突き進み、それを自己の全綱領の首位に置いてゐるところの層がある。この層は社會民主黨員から成つてゐる。彼は全プロレタリアートを自己の味方に惹き入れようと希望してゐる。恐らく、この希望は何時かは實現されるであらう、しかし、それが實現しない限り、生産手段および生産物の流通の社會化は綱領の空想的要素として止まるであらう。その解決のために既に手段をうる問題のみが現實的である。

三段論法のこの連鎖の特殊性はその形而上學的性質にある。それを案出した人々は、すべての形而上學者たちが思想すると同様に思想してゐるのである。「然り——然り、否——否、これより出づるは惡より出づるなり。」彼等にあつては與へられた社會問題の解決の物質的諸條件は或は存在し或は存在しない。これらの條件は發生の過程の内に存在するといふマルクスの言葉が、彼等に對して何等の印

象をも與へてゐないか、さうでなければ、少くとも、どこに『現實的』な社會主義が終はりそしてどこに『空想的』なそれが始まつてゐるかを決定する上にすこしも彼等を助けてゐないのである。

與へられた社會問題の解決のために必要な物質的諸條件の發生過程は、時と共にこの課題を解決しなければならぬその『人類』の全部によつて同時に氣付かれうるものではない。この『人類』は發達の程度を異にし（層）、若しくは天性を異にして（個人）さへもゐるところの層および個人から成つてゐる。既に一部によつて歴史的必然として理解されてゐるものが、他の部分には夢想だもされてゐないことが屢々ある。同じ道をゆく一團の人々の中には、非常に遠方の物象を認めうる遠視眼者と、これらの物象をそれに近付いて初めて識別しうるところの近視眼者が見出されるであらうことは殆ど通例である。これは、遠視眼者を『空想家』にし、近視眼者のみを『現實主義者』と認めなければならぬことを意味するか？ 意味しないやうに思はれる。遠視眼者は他の者達よりもよく全體の道程の方向を達観し、そしてそれ故に彼等の判断は近視眼者の判断よりも現實により近いやうに思はれる。或種の人々は、遠視眼者を、彼等があまりにも早く何時かその側を全集團が通過すべき筈のそれらの物象について話し始めるといふ理由で批難したく思ふかも知れない。しかし第一に、現實的對象について餘りにも早く語り始めることは未だ現實的な地盤を放棄することを意味しない。のみならず、それ或は他の話題をとり上げる時機であるか時機でないかを如何にして判定するか？ 想像して見るが、遠視眼的な人々が、譬へば、道ばたに立つてゐる、そしてそこで旅行者達が彼等に必要

な休息をとることの出来る家について話を始めることが早ければ早いほど、一層速かに彼等はそれに近づくであらう、何となれば一層彼等は急ぐであらうからである。かゝる場合、遠視眼者は旅行隊がすこしでも自己の時間を尊重してゐる限り、あまりにも早く話し過ぎることは出来ない。

がこの場合における遠視眼者達の役割は、労働者階級の全般的運動において社会民主党が演じてゐるところのその役割に非常に酷似してゐるではないか。

『××主義者は唯だ、一方においては各國のプロレタリアの運動において、彼等が全プロレタリアーの一般的な、國民性から獨立な利害を取上げ主張することによつて、他方においては——プロレタリアのブルジョアジーに對する闘争が通過すべき發展の各種段階において、彼等が常に全體としての運動の一般的利益を擁護することによつて他の労働黨から異なる。かくて××主義者は、實踐においては英國の労働黨の最も判然たる常に前進して止まない前衛分子として現はれ、理論的には殘餘のプロレタリア大衆に對して、労働運動の諸條件、行程、及び成果を理解してゐるといふ卓越を有してゐる……彼等は労働者階級の最も當面の目的と利益との名において闘争する、しかしそれと共に運動の未來性をも主張する。』

註1『×××××』ゼネズ、一六一一七、及び三七頁。

マルクス及びエンゲルスがこゝで四十年代の共產主義者について語つてゐるところは、全く我々の時代の革命的社會民主黨に當て嵌まる。

彼等は労働者階級の最も當面の目的のために闘争しつゝある、併し彼等は同様にまた運動の未來性をも主張する。運動の未來性をも主張すること、それはその『終局目的』のために闘争することを、そして正に今、——今日、明日、明後日、各々の與へられた瞬間において闘争することを意味する。若しも運動の未來性が正當に理解されるならば、が現代の經濟的發展の行程を闡明しえた者はそれを正しく理解してゐるのであるが、終局目的の主張の中には空想の一微粒もないであらう。この場合に空想について語ることは、全く勝手な意味を言葉に附することを意味する。『終局目的』はこゝでは、現代の經濟的發展が現實的であるのと同様に『現實的』である。

革命的社會民主黨は實踐においてはすべての文明諸國のプロレタリアートの最も斷然たる、常に前進して止まない前衛分子として現はれてゐる。彼はプロレタリアートの殘餘の部分に對して、殆ど遠視眼者が我々の例における近視眼者に對する關係と同様の關係に立つてゐる。彼は既に、他のプロレタリアがまだ見てゐないところのものを見てゐる、そして、彼等に向つて、將來彼等はどの方向へ進まなければならぬかを説明しながら、彼は彼等の運動を意義づけ、そしてそれを促進しつゝあるのである。どうぞ言つてください。どこにこの場合『空想』があるか？ また何故にこれは『現實的』でないか？

註1 遠視眼者は近距離においては近視眼者よりも目がきかないのに反して、革命的社會主義黨は労働者の最も卑近な利害さへも、『終局目的』を認めない人々よりも通常よりよく理解してゐるといふ相違はあるが。

革命的社會主義黨が、プロレタリアートに向つて彼自身の運動の未來を、彼の『終局目的』を説明しつゝあるその事實は、——この目的の到達のために必要な物質的諸條件が既に發生しかけてゐること、及びこの發生過程は既により爛眼なる人々の眼に認められうるものとなつてゐることを立證する。マルクスの歴史理論の見地からすれば事態は正にさうなのである。しかるにわが『批判者たち』はこの理論を正に滅茶苦茶に解したのである、その爲めに彼等にあつては鋭い眼光を持ち、上述の過程に眼を凝らして、そしてその最後の結果を測定してゐる人々の企圖が空想になり終つてゐるのである。あゝ、諸君よ、諸君よ、諸君は象に氣付かなかつたのである！

八

或は、スツルツエ流の『批判者』諸君は矢張りまだ、正に如何なる箇所において彼等が誤謬を提供してゐるかを會得しないかも知れない。尙ほすこしくこれらの伶俐な『現實主義者』と語ることにしよう。偉大なるロシアの啓蒙學者エヌ・ゲ・チエルヌイシエフスキイが屢々大なる成功をもつて試みた

ところの、初歩的な、しかし時として全く不可避的に教育的である方法に據ることにする。綴りを分つて説明することにしよう、ビー・エー——バ、ビー・エー——バ、——ババ、等々。

經濟關係は人々の見解および彼等の行爲を規定する。しかし人々は必ずしも常に自分自身の經濟關係の性質を理解してゐるものでなく、また必ずしも常に彼等の見解は彼等の經濟關係の發展が行はれると同速度をもつて發展するものではない。見解が自己の發展において著しく經濟から後れることが屢々ある。新しい經濟關係は唯だ時の経過と共に、唯だ次第々々に舊い見解をぐらつかせ、そして新しい見解を産出するのである。原因は結果よりも前に發生する。この争ふべからざる事情によつて、透徹性を惠まれた個人および集團は、人類の前進運動に實際上の参加をなすべき可能を受取るのである。現存の經濟關係の意味を理解した後に、彼等はより透徹的ならぬ他の人々にそれを説明し、さうすることによつて彼等の見解に影響を與へ、また彼等の見解を通して彼等の行爲に影響をおよぼす、それらが、今度は與へられた經濟秩序のその後の發展を助成する。しかし一切は流轉し、一切は變化する。變化することを理解することは、それが自己の發展の最後の段階において何に導くかを理解することを意味する。さうでないかぎり、すでにアリストテレス以來知られてゐるところの完全なる理解は存しないこととなる。與へられた發展過程の最後の段階、終局的歸結を決定しようとする努力は、全く合法的であるばかりでなく、それを理解しようとするすべての者にとつて義務的である。それ故に現代資本主義社會の經濟關係を理解しようとする人々は、自己の理性の一切の力を、果して

どこへこれらの諸關係の發展は導くか、またその發展の過程は何に終局するかを究めることに用ひなくてはならない。若しもこれらの人々が、それは資本主義的生產關係の除去と社會主義的なそれによつての變更に終局することを確信したとすれば、また若しも彼等が、自己の同情若しくは自己の階級的立場によつて、かゝる歸結を喜ぶ根據を持つてゐるとすれば、彼等は他の人々にそれを指し示し、あらゆる手段を講じて彼等の助力を促すであらう。それは彼等の全努力の終局目的となり、それは彼等の全綱領の基礎に横はるであらう、そして若しも彼等がその點において迷妄に陥らないならば、若しも『事物の行程』が、事實において、彼等の終局目的の方向に進むならば、彼等は大胆にかう言ふことが出来るであらう、彼等の足下には鞏固なる現實的地盤がある、空想家は彼等ではなくして、彼等の終局目的を空想と考へてゐるすべての人々である、と。

註1 事實においては、人々の見解の闡明および變化の歴史的過程は、單に經濟的見解の闡明および變化のみに限らない。しかし我々はより明瞭なるその敘述の爲めに事態を單純化したのである。

現代の革命的社會民主黨の終局目的は、現代社會の發展に固有なる無意識的傾向の意識的表現以上ではない。革命的社會民主黨がその旗の下に進みつゝある現代社會主義が、科學的と名付けらるべき權利を持つてゐるのは唯だ、既にシェーリングが自己の——甚だ豊富なる内容の——著述『System

des transendentalen Idealismus』(超越的理想主義の體系)において社會科學に提出したところの、最も高い程度において重要な理論的課題を最後に解決したるが故である、すなはち人々の意識的な(『自由なる』)行爲が、歴史において歴史的必然性と名付けられるところのものを排除しないばかりでなく、自己の必須的條件としてそれを前提することを説明することである。社會主義者・空想家たちは或る抽象的原理から出發した、そしてその力に依據した。科學的社會主義の追隨者達は歴史的必然性の意識から出發し、その力に依據してゐる。『終局目的』は兩者ともにも有する、しかし空想家たちの『終局目的』は現實に對して、科學的社會主義の追隨者たちの『終局目的』がそれに對する關係とは全く異なる關係であつた。それ故にこそ、兩者の間には完き深淵が横はつてゐるのである。そしてそれ故にこそ、上述の活動家は今日においてもまだ『廣い』意味の社會主義者たちの綱領において屢々出遭はれるところの空想的要素と妥協することが困難なのである。彼等は空想を我慢することが出来ない、それ故に彼等に宗派主義者、獨斷論者、及びその他の綽稱を奉られるのである。

歴史運動に影響を與へる爲には、現存の經濟秩序を理解しなければならぬ。現存の經濟秩序を理解することは、その發展道程を、その終局的歸結をも突止めて解明することを意味する。解明されたる後、この歸結は不可避免的に歴史運動への積極的參加の我々の第一の企圖において我々の『終局目的』となる。終局目的を戸口から追出して見よ、それは窓から飛込んで來るであらう、若しも諸君が窓を、社會發展の與へられた道程を理解せんとする、一切の心意と、諸君によつて到達された理解に相

應して行動せんとする誘惑とに、道を閉ざす錠戸を垂しさへしないならば。

『終局目的』が、社會主義者のために多かれ少かれ敬虔なるその非實現性が、意識の光に照して明かであるところの空想となる爲めには、豫め私が現代の經濟秩序の發展は如何なる終局的歸結も持たぬであらうし、またその本質上から持ち得ないことを確信することが必要である。一度かゝる歸結が不可能的であると認められた以上は、正にそれによつて理論的にその近接を促進する爲めに自己の一切の行動を向けようとする努力もまた無力なるものとして承認される。終局的歸結の不可能性は『終局目的』から現實的の地盤を奪ふ。しかし終局的歸結の不可能性に對するこの承認は何を表示するか？それは、資本主義の發展過程が不斷に持續するであらうといふこと、即ち、換言すれば、資本主義は常に、若しくは、少くとも、その廢除を考へる如何なる理由も存しないほどに長く、持續するであらうといふことに對する確信を表示する。これは、諸君の見る如く、既に我々が知つてゐるところの、社會主義は資本主義を排除しない、即ち社會主義の發展すらも資本主義的生產方法に終結を置かぬであらうといふ、偉大なるかつ喜ばしい新思想を我々に向つて披瀝したウエ・ゾムバルト氏の確信である。これはまた同様にベ・スツル・ウエ氏およびその他の『批判者』たちの確信である。一度人間にかゝる確信が生じた以上は、彼には事實において『終局目的』を敬虔なる空想の神殿に收め、穴の修繕を現實的な地盤に立つ唯一の社會的活動とみとめる以外に何物も残るものではない。しかしそれは『終局目的』が社會主義者にとつて空想となるのは、唯だ彼が社會主義者であることを止める時のみであることを意味するではないか。

註1 『科學の材料が我々に斷言することを許す唯一のことは、——とエス・ブルガコフ氏は主張する、——それは現代の經濟的發展は人間が人間を搾取するといふ、最も苦しいそして野蠻なる搾取形態の漸次的な絶滅に導くといふことである。』『資本主義と農業』第二卷、四五六頁である。

九

ベ・スツル・ウエ氏自身、資本主義的生產方法の實際的に無限の堅牢性と『適應性』に對する確信は、思想しつゝある人間に唯一の相應しきものとして慫慂したところの、『終局目的』に對する態度の缺くべからざる前提條件として現はれてゐることを感じてゐる。正に我々にこの確信を持ち込む爲めに、彼は概念、社會革命を、この『偽概念』の完全なる無力を我々の前に曝露しなければならなかつたところの、そしてそれはコチマ・ブルトコフの、『初めが終るところのその終りの初めはどこにあるか？』といふ有名な問の中に美事に證明されてゐるところの、それらの深遠なる『認識論的』考察の助をかりて、『批判すべく』着手したのである。が上述の確信を受容れうるやうに我々を準備する爲めに、彼は我々に向つて、社會的矛盾は次第に『鈍ぶり、鈍ぶり、鈍ぶり』といふこと、及び若しも我々が正統マルクス主義によつて纏はされた偏見なしに事態を観察するならば、自づから、剩餘生産物に具體化された

剰餘價值が、全社會的資本の一機能であることが解るであらうといふことを確證し始めたのである。かくも『現實的な見解』にあつては、資本家による労働者の搾取についての概念には『批判』の甚しい密雲に覆はれて、我々はまったく何故にまた何人に、——『空想家』、『末流』、『獨斷論者』を除いて——資本主義的生産關係の除去が必要であるか理解出来ないほどである、そしてその時社會主義者たちの『終局目的』はひとりでに解決されるであらう、精々我々はこの目的を『我々を高める欺瞞』として輕蔑し去ればよい。ベ・スツル・ウエ氏の『批判』は誤謬と誤解に充ちてゐる、しかしそれは初めから終りまで自分自身の『終局目的』に忠實であるといふ、疑ふべからざる價值を有してゐる。

註1 この最後の思想は論文『労働價值説の根本的矛盾』の中に發表された、『ジーマニ』二月號、一九〇〇年。

ベ・スツル・ウエ氏の『現實主義的見解』を奉ずる諸君——彼等は一軍隊ほどもゐる——は、絶えず『批判』を口にしてゐる。『批判』なしには彼等は一步も踏み出すことが出来ない、『批判』の惡魔が晝となく夜となく彼等を惱ましてゐる。しかし一見したところ、わが『批判者たち』が爲しつゝあるその批判がベ・エム・パウエルクなる——現代のバスター——までを含めてのブルジョア經濟學の新進の代表者たちの教義の全く批判的でない借用に甚しい好意を見せてゐるのは非常に奇異なることに思はれる。そして『批判』の武器が熱心に働けば働くほど、それだけ一方わが『批判者たち』と、他

方——ブルジョアジの職業的代辯者達との間の同意見は鞏固になりゆくのである。『批判者』諸君を惱ましてゐる『批判』の惡魔は現代ブルジョアジの『惡魔』であることが解る。

このことは正に唯だ不注意に一見した場合にのみ奇異に思はれるのである。すこしく立入つて觀察するならば事態はまったく簡單明瞭である。

わが『批判者たち』の歴史的使命は、マルクスの『再吟味』において彼の理論から一切の社會革命的内容を除去することにある。今日その名があらゆる文明諸國のプロレタリアによつて感激をもつて繰返されてゐるマルクス、労働者階級を現存社會秩序の暴力的××に向つて呼び出したところのマルクス、リーブクネヒトの美しい表現をかりるならば、感情においても論理においても革命家であつたところのマルクス、このマルクスは我が教養ある小ブルジョアジにとつて甚だ同情に値せざるものである、そしてこの小ブルジョアジのイデオログとして現はれてゐるのが『批判者』諸君なのである。彼の極端なる結論はこの小ブルジョアジをはね返す、彼の革命的情熱は彼を脅威する。しかし『現代においては』全然マルクスなしに済ますことは困難である、彼の批判的武器はすべての反動的色彩をとどめてゐる者達および各種の國民主義的色合の空想家達との鬭争において不可缺である。それ故にマルクスの理論をその偽教義から救つて精化することが必要である、革命家マルクスに改革家マルクス、現實主義者マルクスを對立させることが必要である。『マルクスに反するマルクス』である！そして今や『批判者たち』の仕事は熱沸する。マルクスの理論の中から、プロレタリアートにとつて

ブルジョアジーとの革命闘争において、精神的の武器として役立つことの出来る一切の命題が相次いで投げ出される。辯證法、唯物論、社會的過程の發條としての社會的矛盾に關する教義、一般的には價值説、部分的には——剩餘價值説、社會革命、プロレタリアートの××——すべてこれらのマルクスの科學的社會主義の不可缺の組成部分が、それらを除いてはその一切の本質的な内容を喪失するところのものが、科學の現在の状態に相應しないところの、傾向的な、空想的な、そしてそれ故に同じ思想家の基本的諸命題の障礙なき發展を期するために、切斷されなければならないところの第二義的な部分であると宣言される。『マルクスに反對するマルクス』！『批判的』仕事は『連續的』に續けられる。そして次第に『批判』のルツボの中から、巧妙に我々に向つて資本主義的生產方法の發生の歴史的必然性を證明しつゝ、資本主義の社會主義による變更に關するあらゆる問題に極めて大なる懷疑主義を曝露するやうなマルクスが出現する。革命家マルクスを『批判』は巧にも殆ど保守主義的マルクスに作り上げる。そしてすべてそれが彼自身の諸命題の助をかりてなされるかの如くなのである。眞にかゝる轉化を経験したのはアリストテレスあるのみであると言ふことが出来る、中世のスコラ哲學者たちはこの異教的哲學者を何かキリスト教會の父みたいなものにしたのである……

『辯證法は、之の神祕化された形態においては、ドイツの流行となつた、それは現存事物を聖化するかに思へたからである。しかるにその合理的な姿においては、辯證法は、ブルジョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり恐怖である。何となれば辯證法は、現存事物の肯定的理解のうち、同時にまた、その否定の、その必然的没落の理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流において、それゆゑにまたその暫時的な方面から、把握し、何物によつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的であるからである。』

註1 『資本論』第一卷ドイツ版第二版の跋文を見よ、第十九頁。

眞實のマルクスは自己の日の終りまでこの辯證法に忠實であつた、しかし正にこの事情が『批判者』諸君に氣に入られなかつたのである。彼等はマルクスの理解を『現實主義』の見地から『再吟味した』として彼等の『再吟味』の結果として受取られたのは、資本主義に『肯定的説明』を與へながら、それと同時にその『必然的没落』を説明し、その『暫時的な方面』から分析することを拒否するところの原則である。この方面からわが『批判者たち』によつて、『再吟味された』マルクスは、唯だ古代の、資本主義以前の生産方法とその基礎の上に發達せる政治的形態とを分析してゐるのみである。かくてわが『新マルクス主義』はロシアのブルジョアジーにとつて我が國における精神的支配のための闘争における最も信頼するに足る武器として現はれる。

註1 西ヨーロッパのマルクス『批判者』の心理とロシアの『批判者』との相違は唯だ、西歐ブルジョアジーが

ロシアのそれよりも年長であるその程度に過ぎない。しかし本質的な差異は存しないし、存しなかつたし、また存しえないのである、すこしく調子は悪いが同じ歌である。

ベ・スツルーウエ氏は『社會改良』の味方である。我々は既に、この著名なる改良がブルジョア社會の『組織』の修繕以上に出ないことを知つてゐる。ベ・スツルーウエ氏の理論においてそれに與へられてゐる姿においては、それはブルジョアジーの支配を脅かさなければかりでなく、それどころか、『社會平和』を鞏固ならしめることによつて、彼の支持を約束するものである。そして若しも我が大ブルジョアジーが今日までこの『改良』に耳を藉すことを欲しなかつたとしても、それは我が『新マルクス主義』に全體としてのブルジョア階級の一般的な特に政治的なる利害の最もよきかつ前衛的表現たることを妨げるものではない。我が小ブルジョアジーの理論家達は大ブルジョアジーの事務家——嚮導者よりもより遠く見、よりよく判断する。それゆゑ正にわが小ブルジョアジーの理論家たちに我々の『中産』階級の解放運動における指導的役割が屬するであらうことは明かである。我々はすこしも、わが批判者たちの中の任意の者がこの意味において極めて『有名』になり、譬へば、我が自由主義者たちの首領となつたとしても、驚くことをせぬであらう。

可成り以前に我々是我々の雑誌『ソシアル・デモクラット』において、國民主義的理論は完全に死滅したといふこと、従つて我がブルジョア・インテリゲンチヤは、國民主義と絶縁して、自己の見解

を、ヨーロッパ化しなければならぬといふ思想を發表した。今やこのヨーロッパ化は既に著しい程度に行はれた、しかしそれは我々にとつて全く豫期せざる形態において行はれた。我々がその必要を指摘した時、我々はそれが『再吟味された』マルクス主義の旗の下に行はれようとは考へなかつた。『百年生きよ、百年學べ、』と正當にも諺は語つてゐる……

註1『ソシアル・デモクラット』の國內問題を見よ、(ゼネバ、一八九〇年)。

今や、我々がベ・スツルーウエ氏の誤謬のみでなく、同様にまた彼の誤謬の *raison d'être* (存在理由) をも知つてゐる以上、今や、我々が彼の概念の混亂の側からのみならず、彼の歴史的使命の側からも彼を理解した以上、今や我々は彼に別れの挨拶を告げて別れることが出来る。今や我々を次の任務が待つてゐる。我々は一般的にはベ・スツルーウエ氏によつて案出されたマルクスの社會發展理論の『批判』が如何に無力であるかを見た。我々は、部分的には、理想の領域および生活の領域における『飛躍』の不可能性を示さうとする彼の企圖が不成功であるのを見た。我々は今や、科學的社會主義の創始者たちが、社會革命と名付けられる『飛躍』を如何に理解してゐたか、また彼等がプロレタリアートの未來の社會革命を如何に想像してゐたかを示さなくてはならない。それを我々は次の論文においてなすであらう、それは我々の『わが批判者の批判』の第二部をなすであらう。

昭和四年五月廿一日 印刷
昭和四年五月廿八日 發行

(定價金壹圓五拾錢)



—判批の者判批がわ—

譯者	外村史郎
發行者	足助素一
發行所	叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
振替東京四二八八九番
電話牛込二五七三番

印刷所
東京市神田區表神保町十番地
文成社印刷所
前田宗松

— プレハローノフ選集 —

『プレハローノフを讀まざりてマルクス主義の理解はあり得ない』——レーニン

竹尾 式譯 (1) 我等の對立 (近刊)

附社會主義と政治闘争

藏原惟人譯 (2) チエルヌイシエーフスキイ (二) (近刊)

丸目利一譯 (3) チエルヌイシエーフスキイ (三) (近刊)

川内唯彦譯 (4) マルクス主義の基礎 (二) (續刊)

山田 恕譯 (5) マルクス主義の基礎 (三) (續刊)

外村史郎譯 (6) わが批判者の批判 定價一・五〇 送料一・二〇

藏原惟人譯 (7) 反經驗批判論・反創神論 (續刊)

外村史郎譯 (8) 文學論 (續刊)

山田 恕譯 (9) 社會思想史の方法論 (續刊)

竹尾 式譯 (10) 十九世紀ロシヤ社會思想史 (續刊)



振山閣書店

東京
平越橋町十二

終

